

GODZILLA Another stage

GZL

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゴジラとの最後の戦いとして、自らの身を散らしたハルオ…。

しかし、彼の死から暫く経ったある日、ゴジラに対してもう一度立ち上がった者が現れた…。

今作はアニゴジの最終章からのIf storyです。

目次

プロローグ	1
1章 故郷の地球（ほし）で…	
第1話	5
第2話	13
第3話	21
第4話	29
第5話	37
第6話	45
第7話	54
2章 結晶纏う青藍（せいらん）のゴジラ	
第8話	64
第9話	72
第10話	80
第11話	88
第12話	95
第13話	106
3章 二体目の破壊の王、顕現（けんげん）	
第14話	117
第15話	124
第16話	131
第17話	141
第18話	149
第19話	157

最終章 黄金の輝き、再来

第20話 |

165

第21話 |

170

第22話 |

176

第23話 |

184

エピソード

最終話 ゴジラ |

192

おまけ

登場人物／怪獣紹介 |

198

プロローグ

プロローグ

「見てるか☒ゴジラ!!?ここにいるのは今残っている人類の中でお前に戦いを挑む最後の1人だ!!?お前が本当にあいつが言っていた破壊の王だと言うなら……この俺を縛る呪いと共に、全てを焼き尽くせえ!!?!!?」

ヴァルチャーに意識を失い、2度と目を覚まさないユウコを乗せて、ハルオはゴジラの真正面からその機体を突っ込ませて行く。

その様子を洞穴のある岩壁の上から、ハルオの子を身籠っているマイナ、その妹のミアナ、そして：ハルオと共にゴジラと何度と戦いを挑んだ盟友たちがじつと見ていた。

ヴァルチャーの速度は緩やかになることはない。むしろ1秒経つごとに速度が更に上がっていく。

彼の運命を察したマイナはすぐに飛び出そうとしたが、それをミアナが止めて首を横に振った。ミアナの目には涙が溜まり、もう諦めたような感じだった。その妹の姿にマイナもその瞳から涙を溢した瞬間：辺りは青白い光に包まれた。

マイナが振り返ると、それはゴジラは熱戦を放ち、2度の爆発音が響いた。

1度目は熱戦がヴァルチャーに直撃した爆発音。もう1つは…炎上したヴァルチャーがゴジラの体表に衝突したときの爆発音。

爆発した時の衝突で衝撃波が起き、それはゴジラから離れたミアナたちのところにまで飛んできた。

「サカキ大尉…それが、あなたの望んだことなのですね…」

そう…。彼は2つの望みを叶えたかった。

1つは自分みたいな人間になってほしくなかったこと、もう1つは…このナノメタルでまた人類が間違いを犯すのでは……と思ったからだ。

その事をマーティンはもちろん、他の人たちも少なからず気付いていた。

マーティンはそう呟き、目元に出来た涙を一粒拭う。

そして…衝撃波によって、春の花は美しく空に舞うのだった。

—1年後—

マイナは無事子供を産み、すくすくと育てていた。

マーティンたちも漸く…と言ったところで狩猟生活に慣れてきていた。人類が作っ

てきた『科学』がこれほど便利なものだったなんて……こういう生活をしなければ一生分
からなかつただろうとマーティンは思っている。

他の者たちは根性がなく、大体が力仕事で狩りなどの危ない作業はしなかつた。これ
が文明を失い科学の力を頼りすぎた人間の末路なのかもしれないとマーティンはつく
づく思った。

そんなある日、ミアナはやぐらからいつものように見張りをしていた。見張りはとて
も重要だ。ゴジラやその他の怪獣が現れた時、それを一番に伝える役割を担っている。

時々、ゴジラが来ることがあるが、この岩壁まで襲来したことはない。ゴジラの亜種
であるセルヴァムはたまに飛んでくるが、ナノメタルの矢じりで作られた弓で簡単に撃
退出来る。

それほど問題はないのだが、今日は違った。

彼女の耳にエンジンの音が聞こえて来たのだ。それは1年前にも聞いたあの揚陸艦
のエンジン音……。

ミアナが見上げると、ここからかなり離れたところに、ハルオたちが乗って来た揚陸
艦と同じ型のものが飛来して来た。ミアナは目を丸くさせながらも、急いで長老たちの
元へと急ぐ。

高いやぐらから飛び降り、みんなの憩いの場となっている広場で声を上げたのだっ

た。

「船……来た！」

たどたどしい言葉を出しながらもそれを聞いたマーティンたちアラトラム号の船員たちは驚くのだった。

これは……ハルオの意志を継いだ者の物語である。

1章 故郷の地球（ほし）で…

第1話

幼い頃…『彼』が住んでいた日本という国は自然があり、都会があり、何不自由がない生活を送っていた。だが、その頃、世界がどうなっているか彼は何も分かっていなかった…。

毎日のように日本の周りの国々では、悪夢の化身であるゴジラを日本から近付けさせまいと…世界中から集った兵士、傭兵が戦っていた。そのために元は敵だと考えられていた怪獣を味方にして、ゴジラの進行を遅らせていた。その理由を連日ニュースではこう言っていた。

『メカゴジラの開発にまで時間を稼ぐ』…と。

浜松基地で製造されているメカゴジラは外来より来た異星人『ビルサルド』の手引きで作られていた。

メカゴジラでゴジラを倒せる…。

そう言っている彼らの言葉を疑う者はほとんどいなかった。なので、あらゆる人員を費やして、人々はメカゴジラ開発に乗り出し、その開発を待った。その喜びが故に子供達は『メカゴジラのマーチ』などという歌まで流行り出した。

だが：唯一のその希望も：一瞬で消えた。

ゴジラはなんと浜松基地から約100km程離れている太平洋沖から熱戦を放ち、メカゴジラ開発シエルター並びに浜松基地を全壊にしたのだ。

そして日本という国もその時：炎の中に埋もれていくのだった。

そんな中、国際連合でとある議案が可決された。

それは：約15000人の人型種族を他の星へと移住させる議案だった。

これは要するに人類がゴジラに敗れたと言っているようなものだった。それにその移住出来る人数はたったの15000人…。

まだ地球には約2億人の人間が生きていた。

これは人工知能『オムニエレクトイオ』によって選別されたもので、残った者たちは死刑宣告されたようなものだった。

彼も…その選考に選ばれたが、嬉しくはなかった。何故なら、家族や友達と引き裂か

れ、約20年という長い月日を冷凍睡眠装置で寝るといふ、地獄のようなものだからだ。そうやって彼は、長距離航行宇宙船『オラティオ号』に乗り、永い永い旅に出るのだった。

―19年後―

彼はずっと嫌な夢を見続けていた。

自然豊かな地球が怪獣によって汚されていく…。人類はそれを防ぐために様々な作戦を展開し、怪獣を撃退又は殺していった。

しかし、その作戦が原因で更に地球は汚され、最悪の悪夢が現れた…。

ゴジラ……。

彼が奴を恨まなかった日は一度となかった。

彼が大好きだった自然を奪われ、友達を殺され、挙句には地球までも奪ったゴジラ…。そのゴジラが地球で暴れ回り、何も出来ない自分が見える夢を…約19年間、ずっと見ていた。

そんな時、突然彼が寝ていた冷凍睡眠装置の運動が停止した。

19年という長い眠りから覚めた彼に、1つの連絡が入った。

『今すぐ来てくれ。ワタルサトウ大佐』

間も無く29の年を迎えるワタルは、漸く嫌な夢から脱却して、少し良い気分になった。

彼はいつものスーツに腕と首を通して、中央委員会の会議室に腰を座らせた。そこにはビルサルドと人類代表と他の面子も揃っていた。

開幕、ワタルが口を開いた。

「どうしたというんです？カール船長」

人類代表並びにこのオラテイオ号の船長であるカール・セバスチャン。元々長かった髭は19年の月日で更に伸びていた。

「重大な問題が発生した。詳しいことは『オムニエレクテイオ』に聞いてくれ」

ワタルは訝しげな表情をして、巨大な画面に目を移した。彼はあの日以降、この人工知能を信じたことは一度もない。

『私の計算……はくちよう座ケプラー425星……到着……不可能……と……推算……』

それを聞いた途端に委員会メンバーの空気がどつと重くなる。

「…ということだ。だから起こした」

「それで…他の皆さんはどうするんです？」

「我々ビルサルドはこの人工知能を信じる」

「私もだ」

船長とビルサルド代表のベルドはこの人工知能に全幅の信頼を置いていた。ワタルはふうと息を吐き、船長に確認する。

「では、どこに向かうんですか？なんのあてもなく、暗い暗い宇宙を彷徨^{さまよ}い、寿命を迎えるのですか？」

「いや、一つだけ手があるだろう？」

そう言ったのは、中佐のカイル・アランバートだ。年も同じくらいで、ワタルとは気が合う仲ではある。

「地球だよ」

その言葉に誰しも息を飲んだ。

確かにその手はある。ここににいる者…いや、まだ冷凍装置で寝ている彼らも地球に還りたくて堪らないだろう。

だが…。

「ゴジラはどうするんだ？」

そう……それが1番の難題だった。

あの悪魔の化身を消さない限り、地球に平和は齎もたらされない。

「私に1つの考えがあります。この母船を使うんです……。1つの賭けではありますが……」

「そうだ！この船には原子化エネルギー砲が搭載されている！それを最大出力まで上げて撃てば、ゴジラだって……」

「ちよつと待て」

急に声を上げたベルドにワタルは止めた。

「原子化エネルギー砲だって？そんなものいつ作ってた☒」

ワタルはそんな兵器があるなんて今初めて知り、少し混乱している様子だった。迂闊に喋ってしまったと、カイルとベルドは口を塞ぐ。

「私も初めて聞いた。説明しろ！」

船長が怒鳴り声を上げると、カイルは肩をビクツとさせて話し出した。

「もし……地球に戻ることにになったら……ビルサルドと協働で製作していました……。だけれど、隠す気は……！」

「もういい」

船長はカイルの話を途中で切った。

「それで、ベルドよ。地球にはいつ戻れるのかね？その君らが作った砲台がどこまで効果を発揮するか見たいものだ」

明らかにイラついている声にベルドは1回深呼吸してから言った。

「今から大体1年後です。それまで…この船に乗っている人たちには身体を前のように動かせるようにさせないと…」

1年で地球に戻る…。

ワタルはどこか嬉しい気持ちと不安な気持ちが入り混じっていた。

あの悪魔が生きている地球に戻るのかと思ってしまうワタルは1人先にトレーニングルームへと足を進めた。

仮にゴジラが生きていなくても…1度地球を捨てた人類を許してくれるのかと…ワタルが思っていると、彼の横に1人の女性がランニングマシンに乗って走り出した。

「お久しぶりです。ワタル大佐！」

「久しぶりだな…リカ少尉。それと…大佐じゃなくて普通にワタルでいいよ」

ワタルとは1つだけ年が違うリカコウナミ。彼女はワタルが10歳…この船に乗ったばかりの頃に仲良くなった女性だった。

5年ぶりに見ても、その面影はちつとも変わっていないかった。

「どうしてこのタイミングで私たちを起こしたんでしょね？オムニエレクトイオは

……」

「それは……………」

ワタルは一瞬何故かを言おうとしかけたが、どうにか抑えて自らもランニングマシンに乗り、元の体力を取り戻すために奮闘する。

あと1年で、ワタルたちは20年ぶりの地球の帰還となる。

しかし、彼らはこの永い宇宙の航海で地球が信じられない姿になっていることをまだ分かっていなかった。

そして…同時刻…地球でも動きがあった。

ギドラとの激しい戦いを終え、ハルオの特攻を受けても傷一つ付かなかったゴジラが元丹沢大関門の地下へと移動を開始したのだ。この予兆は何なのか…。

これは1年後に来るオラティオ号に反応してなのか、もしくは『別』の何かが原因なのか…。

それが分かるのは、地殻へと潜り、エネルギーを蓄え始めたゴジラしか知らない。

第2話

地球に戻ると決まった後、他にも眠っていた人たちを長い眠りから起こした。しかし、中にはそのまま目覚めることのない者たちもいた……。危惧されていた訳ではないが、それでもワタルたちのシヨックは大きかった。

亡くなった人たちは簡易なビニールに詰め、広大な宇宙へと放たれる。その姿を見ている人たちは涙を堪えて、その悲しみを抑えつけている様子があった。

ワタルが好きだったお菓子屋のおじいさんも……その亡くなった内の1人であった。彼らの死を無駄にしないためにも……ワタルはゴジラを倒すことを胸中で誓うのだった。

――1年後――

ワタルやリカ、中央委員会は何度目かになる太陽系帰還の論議を開始する。最初に今更ながらだが、地球には戻らず元の目的地『はくちよう座ケプラー425星に戻る』という案がビルサルド側から出された。

だが、その案は即座に否定された。

「今からはくちよう座ケプラー425星に向かうと、約45年かかると推測されます。それでは食糧も水も足りません」

と、いうことで否定され、元の目的地に戻るのは実質不可能だとカイルに言われた。他にも他の星に行けないかという案も出たが、それを見つけないいつまでかかるか分からず、結局何年も宇宙を彷徨う可能性が高いと言われ、これも否定された。

結局、このオラテイオ号に乗る者たちに残された道は地球に戻る……ということだけだった。

だが、これを現実にするにはいくつかの問題があつた。それはリカが説明する。

「これから地球に戻る方法は一気に亜空間航行をするしかないのですが、この艦の動力を通常の約2・4倍の出力を出さなければ……」

「それは計算上であり現実ではありませんが、それでも動力に相当な負担を与えるのは間違いありません」

補足説明をワタルが入れる。委員会の雰囲気は重くなり、誰も口を挟まなくなる。

すると、この雰囲気を感じたか、カイルが新しいことを話す。

「で、ですが、もし地球に着ければ良いこともあると思われます！我々が長い間、宇宙を彷徨っている間に地球はかなりの時間が経過されていると思われ、ゴジラも……死んでいる可能性も……」

「それは希望的観測だけで、確証は何もない」

論理的展開だけしか信じないビルサルド代表のベルドはそう言って、カイルを蔑さげすんだ。その傲慢ごうまんな態度にイラついたのか、リカが反論した。

「そんなマイナスな発言ばかりしてるから、悪いことが重なるんですよ！」

「なんだと☒」

「リカ!!？」

ワタルはリカに叱責し、ベルドに謝罪する。

「すまない、ベルド。あとできちんと言わせておく」

フンと鼻を鳴らし、ベルドは背もたれに背を預けた。

「…とにかく、我々の選択肢は地球に戻るしかない…ということは明らかかなようだな。ベルドとカイルは動力をフルパワーで出せるように整備をしてくれ。ワタル大佐は乗員に説明を頼む。リカ少尉もだ」

ワタルは頷き、それに倣なまらってリカも敬礼する。

これで今回の会議は終了した。

ワタルとリカは会議室に残り、リカの説教を開始し始めていた。

コツンと額を小突き、少しだけ怒鳴り声を上げる。

「ベルド代表に失礼な言葉を言うんじゃない！彼らはああいう論理的種族なんだから、

そこは理解しておいてくれ」

「でも…あんなこと言われて悔しくないんですか？ワタル大佐は？」

「何とも思わないな。別のムカついたことも間違ったことも言っていない。正しいことを事実として言っている」

ワタルがそう断言してしまうと、リカは黙ってしまった。

ちよつと言い過ぎたかなと思つたワタルは…。

「まあ…ビルサルドの考えに感化する奴は少なくないから仕方ないのも分かる。でも代表の前では気をつけてくれ」

そう言つてワタルは一人先に会議室を出て行く。

リカは少しの間、その場で彼に怒られたことに滅入つていたが、両頬をパチンパチンと叩き、頑張らなくちやと自らに言い聞かせる。すぐに出ようと思いと、後ろから声が聞こえた。

「なぐに？また大佐に叱られてめげてたの？」

ギクツと肩を上げ、振り向くと肩を組んで偉そうに立っている女性が立っていた。

「別に…。ワタル大佐は間違つてないもの。…そういうユリは何しに来たの？」

ユリはベルド代表の秘書みたいなものではあるが、ビルサルド側ではなく人間側の人である。

「あなたと話したかったのよ、地球帰還について。本当にするの?」

ユリは今日、今回の会議に参加していなかったため、その事を聞きたかったのだ。リカは隠すことなく、全てを話す。

「まあ…可能性としては高いわね。不満?」

「不満ではないわ。でも…突然、目的地に着けないというのがどこか怪しく思わない?」

「…どういうこと?」

「だって、そこまで着けると結論付けたのはあの人工知能よ?それが今になって着けませんでした…:…なんか胡散臭くない?」

リカも言われてみればそんな感じがした。

19年も経ってから着けないと概算するのなんて、おかしい…とも思ったが、人工知能も間違いを犯すこともある

「そういうこともあるんじゃない?」

「…そう思えば気楽ね」

リカは何をあんなに疑っているんだろうと、思いつつユリと一緒に部屋を出た。

しかし、ユリの考えは正しかった。

これは仕組まれたことだったのだ。

ビルサルドが管轄している部屋で、ベルドとカイルは密談を始める。

「しかし…いくらビルサルドとはいえ、こんなこととして良かったのか？ 本当ははくちよう座ケプラー425星には着けるんだろ？」

「いいのさ。『こいつ』が作動したのが分かったから、地球に戻れたら俺たちのやりたい放題さ」

ベルドが指差す先には、銀色に光り輝く金属が浮いていた。

「ナノメタルが地球で作動したって本当なのか？ 俺には信じられないが…」

そう…。カイルが覚えている限り、ナノメタルは対ゴジラ専用兵器『メカゴジラ』作成のための素材だ。だが、その自律思考型金属…簡単に言えば、生きた金属はゴジラは熱戦を何度も受け、基地ごと吹き飛んだはずなのだ。

「明らかさ…。俺らが作ったナノメタルは溶けることも吹き飛ぶこともなく、しっかりと生き続けていて、誰かの手によって作動した。恐らく…アラトラム号の乗組員が再起動させたんだ」

「アラトラム号？ あいつらも地球に先に帰ったのか？」

「そいつは分からない。だが…わざわざ住めるかも全く不明の星に行くなら…地球に

戻った方がマシだ」

「だから…人工知能をハックして、自分の意志で動かしたのか？論理的展開を第一とするビルサルドにしては、偉く希望的観測じゃないか？」

「ふん、メカゴジラは負けん。それは断言出来る」

「どうだか…」

カイルはコーヒ^{すず}ーを啜る。まだ半信半疑なため、ベルドの話信じ切ることは出来なかった。彼も幼い頃、メカゴジラがゴジラを倒すと信じていたが、結局は負ける始末…。

それ以来、何かを簡単には信じられなくなっていた。

「とにかく、我々は地球に戻る。そこで…また新たな繁栄を築こうじゃないか？」

ベルドはそう言つて、ニヤツと不気味な笑いを浮かべた。

カイルは無表情のまま…ベルドを見詰めているのだった。

それから2日…。オラテイオ号は、長距離亜空間航行の準備を開始した。動力室のパワーをフル回転させ、地球にまでワープするのだ。

当初は無理に作動させて、オラテイオ号が停止する可能性が高かったが、ビルサルドの開発力の高さでそれをカバーした。

「亜空間航行、開始!!?」

カール船長の一言で、オラティオ号は亜空間に突入した。

真つ暗な宇宙に捻じれた空間が生まれ、その中にオラティオ号が入っていく。

そして：亜空間航行を終えた途端、その艦の前に青く美しい星が見えるのだった。

第3話

オラテイオ号の外から漏れる青く、優しげな光に乗員の目は釘付けになった。つい20年前まで地球で生きていた人々からしたら……今日の前に写る光景はとても懐かしく思っていることだろう。

中央委員会と操縦者しか入れない部屋でも、昔懐かしき地球の姿に見惚れていた。その中でワタルは小さく呟いた。

「本当に……帰って来たんだな……」

ワタルにとつてはこの地球への帰還はまだ数年くらい宇宙を彷徨つてから帰つてきた感じしかしなかった。それもそうだろう……。この艦に乗っている人たちのほとんどは冷凍睡眠装置で20年中10数年という眠りについていた。時間の感覚が変になつてもおかしくはないだろう。

そうやって全ての人間が地球をずっと見ている、その時だった。

艦内に凄まじい轟音と乗員の悲鳴が響いた。艦もグラグラと揺れ、ワタルやカール船長たちの足は覚束ないくらいにふらついた。

「な、何事だ☒」

カール船長は分析係の者に聞く。

彼らはキーボードを高速でタイピングして、何が起きたのか調査する。のだが、彼らが報告する前に画面にベルドの顔が大きく映った。

「ベルド？何があつたのだ？」

「…実に言いにくいのだが……」

「何でもいい！何があつたんだ？」

ワタルが叫ぶと、ベルドは短い金属質の髪を掻きながら言う。

『今の亜空間航行の影響で、動力室の一部が爆発した』

「なっ」

ワタルたち全員が驚きの声を上げてしまう。

そういうことはあるかもしれない……そう思つてはいたが、いざ起きるとやはり驚いてしまった。

「被害状況は？」

『動力部分の約7割が損壊。全システム復旧までの期間不明』

「…やはり…負担が大きかったか…」

カール船長は頭を抱えた。カールだけではなく、カイルもリカもそういう気分だった。しかし、ワタルだけはそれらの報告を聞いても対して大きな反応は示さなかった。

その理由はこの艦の外に見える大小様々な瓦礫だった。

ワタルの様子に気付いたカイルは彼に駆け寄り、「どうした？」と聞いた。

「外に見える残骸……何に見える？」

「アレか？なんか……何かの金属に見えるが……」

「じゃあ……奥に見えるやつは、人間……に見えないか？」

「は☒」

カイルは窓ガラスに顔が付き、じーと金属の瓦礫の間を見詰める。

ワタルの言う通り、瓦礫の合間に人の形をしたものが浮遊していた。それが人間の死体と分かったカイルは思わず、後ろに下がってしまふ。

「ど、どどどどうしてこんな大気圏外に死体が☒」

「死体だと☒どこだ☒」

ワタルはその方向を指差して、船長たちにも伝える。

船長たちもさぞかし驚いていた。あの死体がどこから来たものか……ワタルは冷静に分析した。

「あれは……恐らくアラトラム号の船員だと思われまふ」

「アラトラム号だと☒ま、まさか……彼らはゴジラに……☒」

その発言した途端に、ワタル以外の委員会メンバーは顔を青ざめた。この艦に乗る人

私たちはゴジラという怪獣の恐ろしさを身を持って体験した者たちだ。

『それなら…今すぐ地球の軌道圏内から離れるのが懸命だ』

「だがベルド代表、動力がまともに動かないこの艦をどうやって軌道から離れさせるんです？」

『それは……』

「それに今地球から離脱は危険だ」

「どういふことですか？大佐」

「俺たちは長い時間をかけて地球に戻ったというのに、また別の星に行くなんて乗員に言ってみろ。どれだけ反対の声が出るか分かったもんじゃやない。なら…最初は現在の地球の状況を調査してからの方が賢明だと思います、船長」

カールは腕組みして少し考えたのちに、頷いた。

「…それもそうだな。先に探査艇を数機送ってから地球離脱は検討しよう」

『おい！カール!!？それでもゴジラが襲って来たらどうするんだ☒』

喚くベルドに対して、またリカは反抗的な発言をした。

「決めるのは船長です。あなたではありません」

「っ！」

ベルドは画面でイラついたような表情を見せたが、リカが言ったことが正論だったた

め何も言い返せずに、連絡を切ってしまった。

ふうと息を吐くりカにワタルはまた溜め息を吐いた。いつになったら目上の人間に對する態度が作れるのだろうか…。

すぐに探査艇による調査は開始された。

もし：アラトラム号を破壊したのがゴジラなのか、違う何かが原因なのか調べるのが中央委員会の最優先事項だった。仮にゴジラだったとしても、カイルとベルドは共同で作ったという原子化エネルギー砲…とやらで倒せると豪語している。

それも兼ねての調査だ。最初は5機ある探査艇で特定地域を調査する。主な内容はどのような生物が生息しているか、地形、空気中に浮遊している元素、そして…ゴジラはどうなったのか…。

中央委員会の中には長い年月が経ち、あの不死身とも言える強固な身体を持つゴジラは死んだのではないかと予想している人もいた。だがそれは、ワタルからしたらただ現実を受け止めたくないがために、そう言い張っているようにしか見えなかった。

探査艇が地球の大气圏を突入してすぐに、温度で観測された地形情報と音が流れてきた。

「風の音…だけだな」

「もつと高度を落とせないか?」

そうワタルが言うと、探査艇は地表からおよそ100km辺りを滞空し始める。そこで見えた地形情報は、無限に広がる原生林のような形だった。山もあるが、その山も全て同じような木々で覆われていて、元の地球のような色鮮やかな植物があるような雰囲気には見えなかった。

「これ以上は無理です。こちらからの操縦が不可能になります」

「そうか…。文句ばかり言っても仕方ないな…」

しかし、この情報だけで地球に降り立たないというのは言い過ぎだと誰しも思った。

すると、探査艇の年代測定機から、ワタルたちが地球を去ってから何年経ったのかが判明した。

「探査艇からの情報で、地球での経過時間が判明しました。推定するに…: およそ20000年…」

「20000年☒そんなに経ってしまったのか…」

「でも、これはこれで良かったかもしれないな。こんだけ時間が経てば、ゴジラも…」

カイルはそう言うが、ワタルは全く釈然としない。

あの怪物が年月の経過だけで死すとはどうも考えられなかったのだ。

ワタルがこの船に乗り、10年経った時、内密に冷凍装置から抜け出して、ゴジラとの戦いの歴史を興味本位で調べた。

だが、その歴史は地獄とも言っていいほど悲惨なものだった。

特にワタルの記憶の中に残っているのは…驚異の自己防衛能力だった。アメリカ大陸にゴジラを誘導させ、150発もの核ミサイルを投下して滅殺しようとさせた作戦も…全くの無になり、逆に人類居住地域が減少するという最悪な結果を生むことになった。

そんな化け物が人間の老衰と同じ要領で死ぬのだとしたら…どれだけ楽なことかと考えてしまう。

「ワタル、1回、数百人単位の人員を連れて、地球に行くとしませんか？」

カイルからそのような提案が出された。もちろん、ワタルが断る理由はない。

「そうだな…。どれくらい地球が変わったか、見てみたい。カール船長」

「うむ。300人の人員を選別し、地球に一旦向かってみてくれ。我々はこの艦で待機している」

「……分かりました」

ワタルはそう言って、部屋から出て行く。その後をリカとカイルも付いてくる。すぐ

にリカはワタルに質問した。

「ワタル大佐、どうしたんですか？そんな表情をして…」

そう…：ワタルは自分でも気付かないうちにイラついた表情を作ってしまったのだ。それに一早く気付いたリカだった。

「カール船長は明らかにビビっている…。ゴジラという悪魔が生きることが分かったら…彼らは俺が地球に降り立っている間に逃げるかもしれない」

「そんな！あのカール船長はそんなことを…！」

「あり得る」

カイルはすぐにワタルの考えを肯定した。

「…俺はそれでも構わないが…。ゴジラを倒せるなら、俺は…」

ワタルの胸中では、ゴジラを倒すことを秘めていた。

そんな彼の姿にカイルとリカは見惚れ、カイルはこの艦にいる乗員全てを騙して連れてきてしまったことに後悔を感じ、リカはというと尊敬の念が更に増していくのだった。

第4話

ワタルとカイルはカール船長に言われた通りに志願した隊員1000人超から選別して、5機の揚陸艇ようりくていで地球に向かう。もちろん、上の幹部が来ることはなかった。

「地球……どうなってるかな？もしかして…自然豊かな星に戻ってたりして……！」

「あり得るな！だって20000年も経ってるなら、あのゴジラだって流石に生きては……」

「随分とそんな夢物語を語れるな……」

ワタルはそうやって楽しい話をしている隊員の間割って入った。

「ゴジラが死んだかどうかはちつとも分からないんだ。そんな根拠もない話ばかりしていると、後で最悪な事態になった時に心が持たないぞ？それより、大気圏突入の準備を開始しろ」

ワタルがそう言うと、彼が大佐という階級だからか…その口調が恐ろしかったのか…または、ワタルが他の隊員から非常に信頼されているからなのか…すぐに準備を始めた。

ワタルたちが乗る揚陸艇が先頭で、1番最初に地球へと上陸する予定だ。こういう場

合、あの委員会の幹部クラスは食事の毒味をさせるのと同じように、先に危ないことは部下にさせていることが多い。だが、ワタルだけは別だった。何をする時でも先頭に立ち、全員を引っ張って来た印象が強く残っていた。

「ワタル、もし…ゴジラが生きていたら、どうするつもりだ？」

「それはその時考えるさ。まあ、お前がベルドと一緒に作った原子化エネルギー砲とかいうやつもあるからな…」

「……ああ」

カイルはワタルが自分に全幅の信頼を託しているのがすぐに分かった。だが、その分…カイルはワタルだけでなく、5機全てに乗っている隊員全員を騙して地球に戻してしまったことに後悔ばかりが募っていく。

カイルは思い切って、ワタルにはその事を伝えようと口を開きかけたところで…リカの声が重なった。

「ワタル大佐、大気圏突入します」

「そうか。全艇、着陸用意！…で、カイル、何か言ったか？」

「い、いや…」

カイルの反応や言動に少し違和感を感じたが、それは後にして、ワタルは外の光景を見る。パワードスーツを着て尚且つ、防護マスクをするという、地球に降り立つにはお

かしい格好ではあるが、現在の地球の空気や気圧がどうなっているかは全く分かっていない。

だからなのだが……ワタルたちはこんな姿で降り立つなんて、まるで今降り立とうとしている星は異星なのではとも思えてしまう。

大気圏に突入した揚陸艇は激しい炎に包まれるが、それはすぐに無くなり、分厚い雲が最初に見えた。

「厚い雲だ。これじゃあ太陽は地表にはまともに届きそうにはなさそうだな……」

「そうですね……。現在の地球環境は20年前……いや、それは私たちの感覚か……。約2000年前よりかは劣悪と考えられます」

「……そうか」

ワタルは悲しげな声で答えた。

厚い雲の中を通過すると、鬱蒼としたジャングルが広大に広がっていた。まだ地表から数百mはあるが、ここから見る限りゴジラも、他の生物も見当たらない。

すると、そんなジャングルの真ん中だけ焼け野原のように木々が消えており、その真ん中にはツタが絡まった何かの機械らしきものが放置してあった。

「おいーアレを見てみろー!」

ワタルが声を出すと、全員の視線がそこに向いた。

アレは間違いなく揚陸艇だった。しかし、オラテイオ号から出されたものではないのは明白だった。

「着陸だ。あの揚陸艇を調べる。コンピュータを引き抜いてこちらに移せば何か分かるかもしれない」

「了解。全機、着陸せよ」

リカが言うと、ワタルたちが乗る揚陸艇の周りを囲むように5機全てが人類からしたら約20年……地球からすれば20000年ぶりに地球の大地に足を付けた。

酸素濃度が昔より低くなってしまったため、生身で外の空気を吸うことは出来ない。ワタルたちは防護マスクを装備したまま、降りざるを得なかった。

外は幻想的だった。不思議な植生が地球を覆い、雲の切れ間から時折太陽の光が漏れていた。地形も変わっている。ここは元丹沢大関門だったとされているが、昔の名残は何一つとしてなかった。更に険しく、激しい山々や崖が連なる非常に危険な場所となっていた。

それよりもワタルたちは捨てられたかのように置かれた揚陸艇の中に入って行く。中は静かで、草木も入っておらず、自分たちが乗ってきた揚陸艇と大差ない。

コックピットの方に行くが、そこでワタルやリカは戦慄した。

操縦席には死体があった。防護マスクの上から側頭部を撃ち抜かれた人の死体が…。

それに今はマスクをしているから、2人は分からないかもしれないが、この死体は途轍もない腐臭を放っている。かなりの時間が経っている証拠だ。

「……ここで、自殺したのか……」

「……す、すみません！」

リカは耐えられなくなったのか、速攻でここから出て行つた。

ワタルも死体が残ったままのコックピットに居続けるのは不愉快極まりなかったため、すぐにデータを移して、自らの艦へと戻つた。

外では周囲を警戒する隊員たちが立っていた。だが、ゴジラが来れば、人など一瞬であの世行きだ。勇気だけあっても意味はない。

ワタルは先程移したデータを確認する。周りにはカイル、未だに吐きそうな表情のりカ、そしてどうしてかユリも見守っている。

中に残っているデータは、ゴジラに関するものだった。

ゴジラがどうして熱戦を放出出来るのか…、何故異常なまでの自己再生能力を持っているかの仮説…。そして…何より一番ワタルたちの気を引いたのが…。

「『ゴジラを倒す方法…』」

4人とも、声が重なってしまった。ワタルはそんなの気にせず淡々と見ていく。作成者の名前は書いてないが、どうやったらここまで計算出来たのかを尋ねたいくらい素晴らしい内容だった。

これによると、ゴジラは電磁パルスを増幅させる器官をどこかに有しており、増幅させることでどんな武器も通さないレベルの非対称性透過シールドを開く…とのことだった。そして、増幅させるパターンには周期的なノイズがあり、パルスを増幅させる部位を集中的に攻撃、そして破壊すればゴジラを殺せる…と書かれている。

はつきり、理論は通っていいような仮説ではあるが、ワタルはこの仮説を簡単に鵜呑みにすることは出来なかった。もし、本当ならどうしてあの隊員は自殺をしていた？ゴジラを倒せなかったからなのではと、考えてしまう。

「ワタル大佐、どうします？この仮説を検証する方法は、実践するしか…」

「簡単に言うな。仮にこの通りの作戦をやるにしても、問題がありすぎる」

「そうよね…。まずゴジラのどこの部位を破壊すればいいって言うの？それに…分かってても、そう簡単に出来るものじゃないわ」

「他にもある。この作戦は人力戦だ。人類が今までやってきた作戦となんら変わっていない。他人を犠牲にしてまで、この作戦をやるのは俺は反対だ」

ワタルはそう断言した。ワタルは確かにゴジラを倒したいと強く思っている数少な

い人物だ。他はあの地獄の話を先代から聞かされたお陰で全員が戦意を喪失している。そんな状態で勝てるわけがない。

「じゃあ、どうするんですか?」

「…暫く様子を見よう。ゴジラの姿は見えないし、もう少しこのデータを深く調べて……」

その時、外から悲鳴と銃声が入り乱れた。ワタルたちも銃を持って外に出ると、見張りをしていた部隊が謎の生物に襲われ、応戦しているところだった。

「な、なんだアイツは☒」

「パウードスーツ部隊はすぐ様援護しろ!!?急げ!」

「大佐!危ない!!?」

リカの声が出たかと思えば、横からあの生物が突っ込んで来た。しかしそれをリカが救ってくれた。

「すまない、リカ!」

「いえ!このくらい!……!」

空を飛び、地面を走る生物にワタルたちは容赦なく銃の弾を撃ち込んだ。しかし、弾はめり込まずに体表に当たる度に金属質の音を奏でる。だけどきちんと倒れてくれるから、まだ良かった。

パワードスーツや多脚砲台のお陰で大体の数は制圧出来た。

負傷者をすぐに揚陸艇に乗せて、手当をさせている間に…ワタルはこの生物にゆつくりと近付いた。

黒い皮膚で、触ってみるとまるで鋼鉄みたいな硬さだった。歯並びは乱雑で、赤色の目がタランチュラのように複数付いている。

「なんだ…この生物は…」

ワタルは、この不気味な生物を見て、思わずそう呟いた。

そして気付いた。この星で危険なのはゴジラだけではないと…。

第5話

謎の生物に襲撃を受けたワタルたち一行はこの生物が何なのかカイルらと議論を展開していた。

「一体こいつは何だんだいいきなり襲いかかってきて……！」

「……リカ、負傷者はいるか？」

「3名だけです。いずれも軽傷です」

「良かった……」

「ただ……」

「ただ……なんだ？」

「あいつらのせいで私たちが乗ってきた揚陸艇は全て破損して、無事に母船へ戻れなくなり……」

それを聞いた周りの人たちは悲鳴とも言えない声を上げた。

それはそうだろう。こんな獰猛な生物がこの樹海の中に潜んでいるのだから……。すぐに逃げ出すという手段も絶たれてしまった。

「そいつは……ヤバイんじゃないのか？ワタル」

「ああ……。一度船長とコンタクトを取りたいのだが……。どうも通信の調子が悪い……」
ワタルはもちろん他の隊員もだが、地球に到着してから満足な無線通信が出来ていないのだ。機械の不調だと思っっているワタルだが、その不調が今は大きな問題となっている。

「とにかくこの警備は強化しよう。話はそれから……」

「大佐！また奴らが来ます!!？」

話をしていると、どうやらさつききの奴らがまたこちらに向かつて来ているらしい。すぐにワタルたちはパワードスーツや多脚砲台に乗って、奴らを迎え撃とうとする。

そして森から飛び出して、引き金を引きかけた時、向こうからヒュンと風切り音が聞こえた。そして、その風切り音が聴こえてすぐに奴らの頭や首辺りに弓矢が突き刺さっていた。

怪物は悲鳴を上げて倒れ、何かに恐れるようにワタルたちの前から消えていった。

「今のは☒」

全員が振り向くと、そこには仮面を付けて弓を構える謎の集団が立っていた。肌は褐色で、まるで縄文人のような身なりをしている。更に褐色の肌には白いペンで塗られたように鮮やかな模様が入っている。カイルたちはすぐに怪しみ、銃火器を構える。だがワタルは……。

「待て！撃つな!!？彼らは助けてくれたんだ！」

確かにその通りだ。もし彼らがワタルたちも敵と見なしているなら、既にあの矢で射抜かれていることだろう。

「ちよつ……ちよつと失礼！やつぱり！君たちは……！」

謎の集団の間から同じ服装をした人物が現れたが、彼らとは明らかに違った。まず仮面を付けておらず、何より肌が白だった。髪は金髪で年は30代後半から40代前半に見える。

「君たちは……オラティオ号から来たんじゃないのか☒」

「ど、どうしてそれを……。それにあなたは？」

「ああ！失礼、私はアラトラム号少佐のマーティンだ」

『アラトラム号』の名を聞き、誰しも驚いた。まさか……生き残りがいたなんて……と。

「俺はオラティオ号大佐のワタルだ。マーティン少佐、地球は……一体どうなっているんだ？」

「話したいことは山々ある。だけど、早くここから離れよう。彼らが君たちを保護してくれる」

そうマーティンが言うと、謎の集団たちは頷いた。

何にせよ、ここから離れるのは先決だと思つたワタルは、マーティンたちの後を付い

ていくのだった。

ワタルたちが到着したのは岩壁に作られた洞穴だった。入り口には木製の門があり、勝手に入ることは出来ない。マーティンや彼らはすぐに入っていくが、ワタルたちは少し躊躇してしまう。

全く分からない種族の住居に入っていくなんて：誰しも足を止めてしまうことだろう。だが、ワタルは意を決して洞穴の中に足を踏み入れた。それを見たりカヤカイルも、勇気を振り絞って中に入っていく。

中は意外と明るかった。母船の灯りには負けるが、それでもここで生きていくだけなら十分な光量だった。狭い通路を進んでいき、途中で開けた場所に出た。

そこには無数の穴があり、そこからは仮面を被っていない彼らは出入りしていた。

「あそこが彼らの家だよ」

マーティンはここで説明を入れてきた。

「彼らはフツアの民だ」

「フツア？」

「我々が地球から脱出した後でも残っていた人類の末裔たちだ」

それを聞いて、ワタルの心は締め付けられた。

彼らが、自分たちが置いてきた人類の末裔なのかと…。20000年経つても生き残っていた驚きと嬉しき、そして、昔の時代より遥かに文明が衰退した光景に…ワタルは申し訳ない気持ちで一杯になった。

「私も彼らに助けられた。フツアは友好的な種族だから警戒することはない」

「ありがとうございます、マーティン少佐」

「マーティン少佐は慣れないな。いつも『博士』って呼ばれてたからね」

「では…博士、あの生物は何ですか？」

ワタルはここで1番気になっている質問をマーティンにぶつけた。マーティンは淡々と説明を始める。

「あれはゴジラの細胞を持つ生物…：：：厳密に言えば、ゴジラの亜種、と言ったところだ」

「ゴジラの…：：：亜種？」

「それだけじゃない。この地球上のほとんどの生物にG細胞が入っている。つまり…：：：地球そのものがゴジラにひれ伏したということだ」

「そんな…：：：そんなことが…」

リカは信じられないと言いたげな声を上げた。

「確かに信じられないだろうが、それが事実だ」

「……博士、他の人は？アラトラム号の……」

「ほとんどが死んだよ。母船は恐らく……アイツに……」

「アイツ……？まさかゴジラが！」

「違う！ゴジラじゃない！」

マーティン即座に否定した時の表情は恐怖で歪んでいた。

あの表情はただ者ではないと分かったワタルはそれ以上聞かないことにした。

「博士、じゃあ、ゴジラはまだ……」

「ああ、生きているとも……」

それを聞き、ワタルは例の研究内容をマーティンに見せた。

「マーティン博士、これで……本当にゴジラは倒せるのですか？」

マーティンがその内容を見ると、一瞬で目を丸くさせて、ワタルたちを一瞥した。

「どこでこれを☒」

「放置されていた揚陸艇の中にありました。……中には自殺体も……」

「これは……サカキ大尉の……」

マーティンはそう小さく呟く。

ワタルにも『サカキ』の名は聞こえたが、それが誰なのか全く分からない。

「確かにこれで倒せるが……奴は……」

マーティンが更に何か言おうとした時、大地が揺れた。

ゴゴゴゴと地面が鳴り、この洞穴内の小石が僅かながら落ちてくる。

そのすぐ後に、ワタルたちの耳に絶対に聞き間違えることのない雄叫びが…洞穴に響いてきた。

「今のは……！」

「ゴジラだ！」

「外からだったぞ？しかもかなり近い！」

「カイル、リカ、部隊を編成して行くぞ!!？」

そう言っつて、ワタルはゴジラに対する憎しみを抱いたまま洞穴から出て行く。マーティンはそれを止めようとしたが、その姿は初めに見たハルオにとても似ていて、止めようにも止められなかった。

だが、マーティン以外…オラティオ号の船員は知らない。

この星に20000年という長い月日を生き抜いたゴジラが……どれほど恐ろしく…強大な敵だということ…。

その頃、マイナは子供を抱いて、卵の前で祈りを捧げていた。

もうじき、ハルオが死んで1年になるがこの子がすくすくと育ってくれば……と

願っていた。

すると、固く閉ざされていた卵の一部に、ピキッとヒビが入った。

「え×」

驚きのあまり、間の抜けた声を上げてしまうマイナ。

だが、その一回だけでそれから卵には何の変化も見られなかった。

しかし…産まれようとしている卵の中の何かに、これはまた良からぬ前兆なのでは…とマイナは思わざるを得なかった。

第6話

ワタルたちが外に出ると、例の震動がより大きいことが身を持って感じた。フツアが住んでいる岩壁の脆くなったところはゴロゴロと小石が落ち、金属質な木々はバサバサと揺らめいている。

その樹海からは先程ワタルたちを襲った怪物たちも何かから逃げるように急いで大空へと舞って行く。

そして…その樹海の中に一際大きな黒い身体が姿を現した。

アレを忘れる者はいない。木々を薙ぎ倒し、着実にこちらへと足を進めるゴジラは…ワタルたちを見つけたのか大きな咆哮を轟かせた。

「マズい！ゴジラはこっちに來ている…！」

「急いで揚陸艇に戻って、奴の気を逸らすんだ!!? フツアの人たちの居場所を無くす訳にはいかない！」

「待て!!? ワタル大佐！」

そう指示していると、洞窟からいつの間にか機密服に着替えたマーティンが出てきた。

「博士！」

「君たちは揚陸艇に戻ってゴジラから距離を取るんだ！足止めはフツアの人たちがやってくれる」

「え？でもどうやって…」

リカが困惑していると、マーティンは声を荒げた。

「早くするんだ!!？全滅するぞ！」

「わ、分かった！全部隊！急いで揚陸艇へ戻るんだ!!？」

方向は分かっているため、ワタルたちは揚陸艇に戻ることは出来る。

しかし、それではここにいるフツアの人たちはどうするのか、ワタルは気になったがマーティンがああ言っている以上、信用するしかないと思つた。

全員が樹海の中を駆け抜けている間、双子のマイナとミアナは卵に手をかけていた。ミアナは最初、上の方に出来ている罅ひびを見て少し驚いたが、それよりも先にここから気を逸らすことに専念した。

マイナとミアナの能力は、人類と対話するための架け橋とするだけではない。ハルオの時、マイナは彼を助けるために卵の力を借りた。それと似たようなことを今回もする

つもりだった。

「卵よ、我らの願いを聞いてくれたまえ。我らフツアの民を…守りたまえ！」

ワタルが揚陸艇に乗り、エンジン作動するのを待っていると、突然ゴジラが近付こうとしている岩壁から離れたところに輝く影が出来上がっていった。

その形は、ここにいる生物とは異なったもので、誰の目から見ても昆虫の形をしている。ゴジラはその姿を捉えると、そつちに標的を変えた。それを確認した昆虫の幻も背を向けて、岩壁と真逆の方向に向かっていく。

だが、それを逃さないと言わんばかりにゴジラは背びれに電気エネルギーを蓄積させ、口先から熱戦を放出した。

昆虫の幻は熱戦をすり抜けたが、熱戦で掻き消されてしまった。しかも熱戦は樹海の真ん中に着弾し、爆発を起こした。

ゴジラは昆虫の幻が消えたことで、獲物を始末したと思い、再び咆哮を上げた。だが、囷となっていた昆虫幻が消えてしまい、ワタルたちが乗る揚陸艇の存在に気付かされてしまった。

「マズい！早く離陸しろ！」

「それだと間に合わない!!? 逃げてもこの揚陸艇は修理したばかりでエンジンはボロカスだ! 誰かが囿にならないと、全員死ぬ!」

ワタルはそう言つて、自分が囿になるために多脚砲台に乗り込もうと席を立つたが、カイルに止められた。

「俺が行く。お前は皆をまとめてくれ」

「バカ言うな。ここは皆をまとめる俺だから行くんだ」

「ゴジラを倒して地球を取り戻すのが…お前の長年の悲願だろ?」

そう言われて、ワタルは何も言えなくなつてしまった。

「俺に任せろ」

カイルはそう言いきつて、1人多脚砲台に乗り込んで、揚陸艇とは別の方向に進むと同時に砲撃を開始した。その光景をモニター越しに見ているワタルは驚愕した。あれでは自らをターゲットにさせているも同然だった。

「何やつてるんだ!!? 早く離れろ!」

『いいや…俺にはワタルたちをここに連れてきた罪を償う必要がある…。こんな危険だらけの地球へと連れてきたな…』

「連れてきた? 何を…」

『俺とベルド代表で人工知能をコントロールして、ここに連れてくるように仕向けたん

だ…」

それを聞いている全隊員は大きく目を見開いて驚いた。

リカはユリの言う通りだったんだと思った。

そんな話をしてる間にも、ゴジラは背びれからのエネルギーで空間電位を上昇させていく。

「もういい！そんなことは後でいいだろ☒早く脱出を…」

『ワタル』

無線から聞こえたカイルの声は、実に清々しいものだった。

『ゴジラは…任せたぞ…』

ワタルがまた何か言おうとした時、無線に強烈なノイズが入り、防護マスクの横に『N
O Signal』と表示される。

外を見ると、ゴジラの側では何かが炎上していた。それがカイルの乗っていた多脚砲台であることはすぐに分かり、ワタルは彼の名を呼ばずにはいられなかった。

「カイルーーーーー!!??!!??」

その声は虚しく響くだけであった。

ワタルたちは一番最初に着陸した盆地にまた集まり、現在状況をカールに報告していた。

『何カイル中佐が殉職』』

「はい：今すぐ地球に帰還しようにも、揚陸艇はほとんど損壊して航行不能。しかもそこから新しい揚陸艇を用意してもゴジラに撃墜されるでしょう」

『では、どうするつもりだ？』

「ゴジラを倒すのみです」

まだカールが何か言いたげな表情だったが、すぐに無線での通信は終了した。

ワタルは一息吐き、カイルの死をしつかりと受け止めた。

幼き頃に経験したことだからもう慣れていると思っていたが、そんなことは微塵もなかった。

やはり：友が死んだ悲しみは襲ってくる。20年宇宙を放浪していてもそこは変わっていないかった。

ワタルは多脚砲台の上に立ち、全員の表情を伺う。

そこには2種類の表情があった。1つは完全にゴジラという最悪の化身に対する恐怖心が蘇った者または感じた者。もう1つは、ワタルと同じようにまだゴジラとの戦いを諦めていない者：。どちらかと言えば前者が多い。当たり前だろう。初めてゴジラ

を見たと思われる若者も少なくはない。

すると、リカも砲台に上がってきてワタルに聞いてくる。

「ワタル大佐、これからどうするんですか?」

「…俺はカイルの死を無駄にはしない。あいつは俺たちに重要なことを教えてくれた。みんな!聞いてくれ!」

ワタルの声に全員が耳を傾けた。

「カイル中佐は言っていた。『ここに連れてきたのは俺だからその罪を償う』…と。だが、それと同時に奴はゴジラを倒すための重要なことをしていたんだ。一部の者は見ただろうが、ゴジラを倒す方法の書類にあったシールドを増幅させる部位…それをあいつは…自らの命と引き換えに教えてくれた」

「その…部位とは?」

「背びれだ。そうと分かれば話は早い。俺はあのマニュアル通りに作戦を展開させて、ゴジラを倒す」

「しかし…ワタル大佐!アレで本当にゴジラを倒せるなんて確信があるんですか☒」

そういう声があることはワタルも予想はしていた。

「ここににいる者たちの大半は弱気だ。そんなのではゴジラに対抗出来るわけがない。

「じゃあ…また放浪の旅に出るか?」

「ちよ……大佐!」

リカが発言を止めようとするが、ワタルは続けた。

「俺は幼い頃、ゴジラを倒す倒すと言っていた大人たちを信用していた。だが…結局は倒せず、俺たちは星を捨ててまで逃げ出した。それをもう一度繰り返すのか!歴史を繰り返すのか!俺はここで断ち切る。20年もの間、俺たちを苦しめてきたゴジラを倒して……!」

ワタルの強い意志が籠った演説は効果絶大だった。絶望に満ちていた隊員たちの心を和らげていった。

暫く無言が続いていると、1人の隊員が「俺、やります!」と声を上げた。それに続いて続々とゴジラ討伐戦に望む声が上がった。

「みんな、ありがとう!」

「私たちも手伝おう!!?」

「マーティン博士!」

再びマーティンは姿を現した。

「フツアの人たちを安心させるにも奴は倒さなくてはならない」

「よし、リカ!まずは母船との通信を万全にするんだ」

「了解!」

「つー！」
そうやって、作戦の準備を始めると、不意にワタルの右目にツンと痛みが走った。

一瞬閉じた右目をもう一度開くと、そこは全くの別世界だった。

見たことのない図形が水晶体の中を移動していた。

そして…男の声が聞こえた。

『やはり……時は、我々の味方だった……』

そう聞こえてからすぐに右目の痛みも別世界の情景も無くなった。

「なんだ……今の……」

とても印象的で忘れられそうにないが、今はゴジラのことと頭がいっぱいなため、ワタルは忘れようと思った。

だが、これは…再び黄金の翼が舞い降りる前兆であったのだ…。

第7話

「それで…どうやって奴を仕留めるんですか？」

「ゴジラが非対称性透過シールドを増幅させる部位は分かった。作戦もある。しかし…どうやって背びれを破壊するか…だ」

「一斉射撃ではダメなんですか？」

まだゴジラのことをあまり知らないような青年がそう聞いてきた。

ワタルは彼の前に立ち、質問する。

「名前は？」

「はっ！ムンベルト・シャー少尉です！」

「今から言うことを覚えておくんだ。それで、この事実を知らない者たちに伝達するんだ」

「分かりました！それで…その内容は？」

「ゴジラは攻撃を受けると、シールドを展開する。このシールドは核兵器でも破れなかった代物だ。今の俺たちの装備では奴には勝てない。だから、シールド展開を無くすまで無理な攻撃はしないようにと」

「はい！」

シャーは先にホバーに乗って、伝達に行った。

すると、マーティンが手を挙げて言った。

「問題はまだある。どうやってゴジラを足止めするかだ」

「どうして足止めを？」

「あの作戦通りにするには、ゴジラを固定し、なおかつ背びれを狙える位置に置いておかななくてはならない。だが…一斉砲撃だとそれは難しい」

「それなら……私に案が…」

すると今度はユリから案が出た。

「今とはかく何でもいい。言ってくれ」

「こうすれば……………」

ユリの案を聞いた4人はそれなら行けるかもしれないと思った。

「よし！作戦は決まった！母船に連絡だ。あのエネルギー砲を撃って貫えるようにしない……………」

作戦の準備が始まった。

まず、ゴジラを特定の位置に誘導する。これはホバー数百機と多脚砲台で対処する。同じくホバーに乗っているワタルは指揮官ではあるが、自らこのホバー部隊に志願した。一部のビルサルドからは止めると言われたが、ただ指揮しているにだけでは彼の気が収まらなかったのだ。

「かなり危険な作戦だ。フツアの人たちも手伝ってくれるが、油断はするなよ」
無線を通じてそう言う。

実際、ワタルも怖かった。あのゴジラと再び戦うのだ。これまでどの国が戦っても倒せなかったゴジラを……こんな捨て身の乗り物で近づくのだ。

「……目標確認！」

1人の隊員が声を上げた。ワタルも上空から見えた黒い外殻を見て、鋭い眼差しを向けた。

彼らはこれから……荒ぶる神に対して……戦いを挑むのだ。

「砲撃グループ！もしゴジラが俺たちホバー部隊を標的にしたら、どこに当ててもいいから撃つんだ！高速移動しながらな。出来るだけ犠牲を少なくするんだ！」

『了解!!？大佐!』

リカのきちんとした声に安心するワタル。

「よし!!？行くぞ!!？」

「目標ゴジラ胸部！…撃てえ!!？」

ホバー部隊は一齐に砲撃を開始する。

もちろんゴジラに効くはずはない。それは分かっているが、それでもダメージを与えられないのかと、隊員の中では思っている者もいることだろう。

「旋回しろー！」

ゴジラを軸として、部隊は固まったまま旋回する。

これはホバーに乗り慣れた者でも至難の業であった。ほとんどが成功はするが、中には…ゴジラの身体のどこかにホバーが衝突し、そのまま落下する者もいた。

それを見たワタルは舌打ちをしながらも、全員に指示する。

「上昇しろー！ゴジラを引きつけるんだ!!？」

ワタルたちはゴジラの背中を取っている。

ゴジラもワタルたちに興味…というか敵視したのか重たい身体をホバー部隊の方に向けた。

「大佐！ゴジラがこちらの方を向きました！」

「よし！誘導開始だ！行けるぞ!!？」

だが、突然ホバーから騒がしい程の警告音が鳴り響く。

装着されたモニターには自分たちの真後ろで『D a n g e r 危険』の文字がいくつも現

れた。

「……避ける!!?」

熱戦が放たれる前に叫びはしたが、ゴジラの熱線は凄まじいものだった。

部隊の中央を貫き、たった1発の熱線で部隊40人のうち5人が餌食となった。ならなかったワタルたちも熱線の影響か、ホバーが激しく揺れた。

「陣形維持だ!このまま引き付けろ!!?」

ゴジラから距離を取ろうとするワタルたちの背中を狙うようにゴジラはもう1発熱線を放とうとする。

すると樹海の方から一斉に砲弾が飛んできて、ゴジラの顔を直撃した。ゴジラは熱線放出を中止し、青い瞳を樹海内にある多脚砲台に向けた。

「今よ!ホバー部隊と同じ方向に走って!!?全速力よ!!?」

リカの指示で数台の多脚砲台は一気に加速して、トラップの方へと移動を開始した。今のゴジラはホバーと多脚砲台と、2つの獲物が見えていた。

それらを完全に滅ぼすまで:ゴジラの進行は止まりそうにない。

「ユリ!爆発準備は出来たか☒」

『大佐!すいません!!?まだもう少し!』

「くそっ!このままじゃ…」

『足止めを！あと2分……！』

ユリはそう要求するが、2分間ゴジラの進行を食い止めつつ、尚且つ犠牲をあまり出さない方法は何かないかと考えた。しかし、そんな都合のいいものがあるわけがない。「みんな！よく聞いてくれ！！？今、爆破チームから連絡があつたが、まだ時間が掛かるぞうだ。それでゴジラの進行を止めなくてはならない。それには……君たちの命が危険になる。ここで作戦から離脱したいものがあるなら、勝手に出て行ってくれ。俺はまずお前たちの命を優先する！」

この発言の後、ワタルの無線に聞こえてきたのは……ワタルが思っていたのとは逆のものであった。

『何言ってるんですか☒私たちはもう命なんかとつくに捨てる覚悟があります！だって……私たちは大佐の背中を押すんですから！！？』

リカの声を筆頭に次々と励ましの声が出てきた。

ワタルは嬉しくて、涙を流してしまふ。拭うことは出来ないが……ワタルは覚悟を決めた。

「よし！！？ゴジラにもう一度攻撃だ！！？1秒でも長く足止めするんだ！！？」

ホバー部隊は急転回して、ゴジラの正面から突っ込んで行く。

もちろんそんな好機をゴジラは逃さず、自慢の熱線を浴びせる。左右に別れて避けつ

つ、ゴジラに砲撃してその場に留めさせる。

それを繰り返していると、ユリから連絡が入った。

『終わりました!!? もう足止めは大丈夫です!』

「分かった! すぐに誘導するんだ!!?」

ホバーは再びゴジラの熱線が届かないところにまで飛行し、多脚砲台はさつさとトランプのところに向かって行った。

ゴジラも獲物を逃さまいと大きく重い足を必死に動かす。

だが、いくらゴジラでも…人類の知恵がどれほど豊かなのかは、分からなかった。

「起爆しろ!」

ワタルの一言でゴジラの足元では、大地震ではないかと思うくらい激しい震動が発生し、ゴジラの下半身が陥没穴に埋まった。これにより、ゴジラは動きを制限されてしま

う。
「背びれを重点的に狙うんだ! ノイズ波形を怠^{おじた}るなよ!」

予定の位置に配置されていた砲台から何十発と砲弾が飛んでくる。ゴジラは雄叫びを上げるが、下半身をともに動かせなくては抵抗のしようもなかった。

ワタルはホバーで上から観察しながらも、母船のベルドに連絡した。

「ベルドー! いよいよだぞっ!」

『我々の祈願が叶う瞬間だ。いつでも発射体制は出来ている』

暫く砲撃を続けていると、ゴジラの背びれから青白い電撃が走った。

非対称性透過シールドが出来る予兆だ。その波形も全ての隊員のモニター出されている。

『同調までもう少し……！』

全隊員が息を飲む。

「今だ!!?背びれに集中砲火!!?」

ゴジラのシールドが展開される前に、ワタルたちはゴジラの背びれを破壊してシールド構築を阻止した。これでゴジラは丸裸になったも同然だった。

「背びれの破壊を確認!」

「ベルド!!?やれ!!?」

『おう!』

ベルドの声と共に、曇っていて暗かった空が仄かに輝きを持ち始めた。エメラルドグリーン輝きが空を覆い、1本の光線が動けなくなったゴジラの背中を貫いた。

ゴジラは悲壮な目をワタルや他の隊員を向け、小さな雄叫びを上げた。

「これが……人類の力だああ!!?!!?」

ワタルがそう叫ぶと同時にゴジラの背びれから青白い電撃が走り、その身を粉々にし

た。周囲の樹海が少し吹き飛び、ゴジラは絶命した。

ホバーから降り、その墮落した姿を見たワタルは力なく近くににある岩場に腰を下ろした。

「はあ……………」

「大佐！ やった…！ やりましたよ！！？」

「ああ…………俺も、夢なんじゃないかと思ってるよ、リカ…」

他の隊員たちも絶命したゴジラの周りに集まり、それぞれ歓喜の声を上げた。

そんな中で一人だけ、厳しい表情だったのが、マーティンだった。

「今回も…どうにか倒せたか…」

マーティンの小さな呟きをワタルは聞き逃さなかった。

「え？ 博士、今のはどういう…」

『「こことか』と続けて、聞こうとした矢先のことだった。

突然地面が激しく揺れ出し、ゴジラの亜種…通称セルヴァムたちが再び翼を広げて上空へと逃げ出す。

他の隊員も狼狽うろたしていると、今度は青白い光線が地面から立ち上がった。それは死んだゴジラと周りにいた隊員数十人を巻き込んで、全てを焼き払った。

「なっ×」

「まさか……あれは……！」

光線はすぐに消え、次に現れたのは巨大な尾だった。

さっきのゴジラより何倍も大きい尾は凄まじい勢いで地面に叩きつけ、地面を更に揺らした。

「博士！アレは☒」

「……我々が『最初』のゴジラを倒した後に現れたのと、同じだ……。全てを焼き払い、どんな敵をも寄せ付けない絶対な存在……」

マーティンが独り言のように呟いていると、尾の次に……巨大な背びれが見えた。その背びれからは電気がピリピリと走り、先程の熱線が誰が放ったか、一目瞭然だった。

「そんな……奴は……嘘だ……」

ワタルは恐れを成したようにか細い声を上げた。

「誰も勝てる者はいなかった……。20000年の歳月を生き抜いた究極の生物……」

そして、遂にその全体像を見せた『奴』は……巨大なゴジラだった。

マーティンは感慨に耽るふけように、その名を呼ぶのだった。

「破壊の王……ゴジラ・アース……」

2章 結晶纏う青藍（せいらん）のゴジラ 第8話

地球全体が揺れているのではと思ひほどの激震に全ての隊員が固まっていた。身体
の全体像を見せたゴジラ・アースは上体を起こし天に向かって雄叫びを上げた。

「くっ……全隊員緊急撤退だ！」

「いや……待て!!? 様子がおかしいぞ☒」

マーティンの言う通り、ゴジラはワタルたちを一瞥はしたものの、すぐに視界から外
して曇った空をひたすらに見上げていた。

そして、もう一度その尾を地面に叩きつけると、周囲の空間電位を上げていく。

「敵は僕たちじゃない! 別の奴だ!!?」

その頃、オラティオ号でも地球にいるゴジラ・アースは見えていた。その圧倒的な巨
体に悪魔の叫び声に、カールも足を後ろへと退けてしまい程だった。

「なんだ? あのゴジラは……?」

「体高は…推定して300m…。そんな…あんな生物が、地球に…」

「いや、元々だろう」

ベルドが部下を連れて操縦室に入ってくる。

「元々とは…どういうことだ☒」

「奴は我々が最初に戦いを挑んだゴジラだ。ワタルが殺したのはその亜種だったのだ」

「亜種…そんなバカな…」

カールが頭を抱えていると、不意に母船に警報音が鳴る。

「ゴジラ…こちらに向けて熱線を放とうとしています!!？」

「なにっ☒」

映像でも分かる通り、ゴジラは背びれに電気エネルギーを溜め始めている。しかし、そのチャージが異様な程長い気がした。

すると、更に悪い知らせが船内に響いた。

「船体の後ろから未確認物体が接近中！映像、出ます！」

画面に映ったのは白い結晶体のものだった。ぐるぐると回転しながらこっちに真っ直ぐと向かってきているのだ。

「アレを破壊は☒」

「無理です!!？真後ろからでは迎撃出来ません！」

どうしようか悩んでいると、不意に目の前が眩しくなるほどの閃光が乗員たちを襲った。それは、ゴジラから放たれた熱線だった。

だがそれを理解出来る者もいなかったし、理解する時間もなかった。ゴジラの熱線は船体の真ん中を貫き、奥から迫ってきている結晶体にぶち当たった。

オラテイオ号は激しく爆発を起こし、そのまま宇宙の塵と化するのだった。

オラテイオ号とのコンタクトが取れなくなったワタルはまさかと思った。ゴジラが狙っていたのは、ワタルたちではなくてオラテイオ号だったのでは…と。それを裏付けるように曇り空でも分かるくらい、明るい爆炎が見えた。

「くそっ!!?ゴジラめ…!」

「待つんだ!ゴジラがもう一度熱線を吐こうとしてる」

マーティンの言う通り、母船は跡形もなく吹き飛んだにも関わらず、ゴジラはもう一度口元にエネルギーを溜めている。

そこでワタルは上空から何か…赤く炎上しているものがあることに気付いた。

「なんだアレは?」

「大佐!今は早く撤退しよう!ここにいては巻き込まれる!」

ワタルはマーティンに無理矢理押されながらも、ひとまずフツアの人たちが住んでいる岩穴へと向かうのだった。

ゴジラは新たにエネルギーを溜め、今度は熱線ではなく、分子レベルで破壊する超振動波を放った。これで上空から降ってくる謎の物体を消し去れると、破壊の王は思ったことだろう。だが、それを撃つてもなお、結晶体は壊れることも速度を落とすこともない。

2発も連続で撃つたのに、傷1つ付いていないのだ。ゴジラは青き瞳を大きく見開きながらも、落ちてくる結晶体と激しく衝突するのだった。

ワタルや逃げている隊員たちにもゴジラと結晶体の衝突による衝撃波は飛んできた。凄まじい程の衝撃で遙か彼方へと飛ばされる者もいた。ワタルたちも例外ではなく、一旦は木に掴まったが、すぐに遠くへと飛ばされた。

「大佐!!？」

マーティンの叫びも虚しく、ワタルはただただ遠くへとゴロゴロ転がっていく。目が回り、頭を何度も打ち、ワタルは吹き飛ばされている間に気を失ってしまった。

そして、1つの窪みの中に入ってしまふ。

その時、カチツと気絶しているワタルの手が何かのボタンを押した。

このボタンは“アレ”が再び再起動し、その力を解放させるものだった。気絶したワ

タルの傍に人型が形成され、その口からはこう言葉が発された。

「我々に3度目のチャンスをくれるとは…君は、ハルオか？」

その声はワタルには聞こえていない。

リカは衝撃波から逃れて、数名の隊員と小高い丘の上で何が起きたのか確認していた。半径2kmは吹き飛んでいた。

ただ地面が直に見えており、金属質の木々もセルヴアムたちも跡形もなかった。粉塵が未だに立っているせいで、中心がよく見えていない。暫く眺めていると、クレーターの中心に2つの影が見えた。

1つはゴジラと考えて間違いないだろう。

ではもう一つ…ゴジラから少し距離を取って仁王立ちしているアレは何なのか…。誰しもが気になった。

そして、舞っていた粉塵を風が振り払い、ゴジラと会い見えている怪獣の姿が露わになった。

体高はゴジラより少し低い。額には黄色い星の形みたいな角が生えている。身体は黒を含んだ暗い青色。見た目からしてゴジラとやら変わらないようにも見えたが、決

定的に違うのが肩から聳える巨大な結晶だった。その結晶からはバチバチと電気が走っているのが見え、ゴジラと比較しても特徴が明らかに違った。

「奴は何？」

「ゴジラ…ですかね？」

「違うように見える」

ゴジラに似ていてゴジラでない…。

そんな怪物が突然宇宙から降ってきたのだ。

ゴジラも青色の瞳で自分の前に立つ奴をジツと見ていたが、やがて威嚇するような咆哮を放ち、熱線を放つ準備に入った。

「伏せて!!？」

リカはそう叫んだ。

あの熱線がどこに飛んでくるのか分かったものではないからだ。

相手はゴジラが何かしようとしているのにも関わらず、全く動きを見せなかった。勝負を諦めたのかとも思えたが、それはすぐに間違いだと気付かされる。

ゴジラは鼻先から熱線を放出した。だが、それはいとも簡単に跳ね返された。熱線は真つ直ぐ奴に向かっていくはずが、身体に当たる直前で上空からへと曲がって行ったのだ。

すると今度は奴が動き始めた。2つの巨大結晶に電撃を蓄え、それを口から放出した。ゴジラと同じように黄色い電撃熱線が飛んでくる。

ゴジラはそれをまともに受けて、3万トンはあるというその巨大な身体を無理矢理後退させられていく。

「嘘でしょ？あのゴジラが、押されている？」

リカは本当に驚く他なかった。昔…人類はたった50mのゴジラを倒すことはおろか、稚拙な作戦で足止めする事しか出来なかったのに、奴はそれをいとも簡単にやってのけている。

奴は電撃熱線を止めて、相手に軽く威嚇するような声を上げる。

ゴジラも負け時と威嚇するが、その雄叫びに覇気はない。

それを感じ取ったのか、奴は肩の結晶を更に増幅させて、空中へと移動する。

空を浮遊したまま、先程の電撃熱線を何度も浴びせる。

ゴジラは以前として耐えてはいるが、長くは持たないだろう。

そして、奴は遂にゴジラの非対称性透過シールドをも破って、ゴジラの身体に直接、電撃熱線を食らわせた。

ゴジラは悲鳴に近い咆哮を上げながら、巨体を大地に倒した。

トドメを刺そうとした奴だったが、不意に電撃熱線の放出を停止させた。チラリと自

らの肩の結晶を見て、奴はそのまま何処へと浮遊していった。

ゴジラも巨体を起こして、奴が飛んで行った方向に目を向けた。

その瞳には、リベンジに燃える炎がチラついているようにも見えた。

その頃奴は、元丹沢大関門からかなり離れた大地に着陸して、辺りを見回した。ゴツゴツとした大地が見え、奴からすればここでエネルギーを補充するには十分な場所だった。

奴は天に向かって吠える。すると、肩の結晶からまた別の結晶が出来、それらは地面に刺さる。まるで蟻地獄の形をした結晶体がいくつも出来て、そこに入ったセルヴアムは忽ち飲み込まれていく。

奴は勝ち誇ったように、何度も天に吠え続けるのだった。

こうして…人類は再びゴジラ…そして更なる脅威である怪獣たちとの激しい死闘を繰り広げる。

これはまだ…その始まりだ。

第9話

ゴジラ・アースとゴジラに似た何かとの戦闘から逃れて、隊員たちはフツアの洞窟へと逃げ帰っていた。リカとユリは数少ない隊員を引き連れて戻った。中にはワタルもいるだろうと思っていたが、そこには数人程度しか生き残っていなかった。

「マーティン博士！」

「やあ……私も危なかったよ……」

マーティンにスーツは傷だらけだった。如何にしてあの爆発から近い場所にいたのかが見て取れた。

「ワタル大佐は☒」

「すまない……。爆風に巻き込まれて、彼を助ける余裕はなかったんだ」

「そんな……」

リカは膝から崩れた。

この部隊の指揮官もいない。母船とは通信途絶。もうリカにはどうしたらいいのかわかからない。誰にも分からなかった。すると、ユリがセンサーを表示して、リカに言った。

「リカ、これを見て」

ユリが出したセンサーには、ここからそう離れていないところでスーツの反応があったのだ。ポツンと一っ…。

「ワタル大佐かもしれない。マーティン博士、どう思いますか?」

「ふむ、確かに大佐の可能性はある。だが、まだゴジラが彷徨うろたっている。その中を進むのは……」

「そんなの関係ない!」

リカは自分での知らず知らずのうちに大声を上げていた。それは同僚であるユリでさえ、聞いたことがないくらいのものであった。

「大佐を救うのに、いちいちマイナスなことなんて言わないでください! 私はそういうのが嫌いなんです! だから、私が助けに行きます!」

「待って! 私も行くわ!! 博士はどうします?」

「…仕方ない。私も行こう」

マーティンは頭を掻きながらも、2人を追って行くのだった。

全てが…燃え上がっていた。

その地獄の大火の中をワタルは駆けていた。ゴジラが浜松基地を破壊し尽くしてす

ぐに東京に上陸した。当時、ワタルを含めた東京にいた子供達は『メカゴジラのマーチ』といった、ゴジラを必ず倒してくれるだろうと願いが籠った歌を歌うことが多かった。しかし、そんな希望は一瞬にして消え、友達と一緒に逃げるワタル…。熱線が地面や建物に当たり、溶解し、崩れていく。

瓦礫がワタルたちの頭上から迫って、彼らの頭にぶつかった。

「!!?」

その途端に、ワタルは目を覚ました。

息は荒く、スーツの中は汗だらけだ。どうやらさっきの光景は全て幼い頃の夢だったようだ。

ワタルはふうと息を吐くと、周りを見た。

「……は……」

ワタルが寝ていたのは1つの個室だった。一瞬母船だとも思ったが、母船が動く音もしないため違う。それにワタルが寝ていた台…素材となつている金属がいつものものとどこか違うように思えた。

「気がついたか?」

ふと横を見ると、大きな身体をした男が立っていた。

すぐに礼を言おうと思つたワタルだったが、その男が振り向いた途端に、言葉を失つ

た。

その男の身体は金属で出来ていたのだ。流動性のある…まるで生物のような金属に覆われた身体だ。少しだけ警戒心を強めたワタル。

「そう警戒するな。助けたのは俺たちだぞ?」

「礼は言いたいだが、お前が何者か分からないと気が済まないんでね」

「名乗ろう。俺はガルグ。アラトラム号ビルサルド副代表で中佐だ」

「アラトラム? あんたも生き残っていたのか?」

「それは違う。俺たちはナノメタルのお陰で生きてるだけさ…。見た通り、この身体も全てナノメタルで、意識が残っているだけだ。それに礼を言いたいのはこちらだ」

「どういうことだ?」

「君が俺たちを再起動させなければ、俺たちは目覚めることすらなかった。君は何かの拍子に再起動スイッチを押し、ナノメタルを復活させたのだ。1年ぶりに…」

ガルグの言っていることをまだ完全に理解しきっていないワタルだが、助けてくれたこともあるので、敵ではないとは認識出来た。

「とにかく…早くリカやマーティン博士たちと合流しないと…っつ」

台から降りて身体を動かそうとしたが、動く前に身体は悲鳴を上げた。左肩が鋭敏に痛み、まともに動かせなくなる。

「あんまり動くな。身体が壊れるぞ？」

「でも…」

「大丈夫だ。お前のスーツは壊れていない。それを辿って誰か来るさ。にしても…マーティンは生きているとはな…」

どこか懐かしげにガルグは呟いた。

暫くして、ガルグがワタルに語りかけた。

「ほら見ろ。案の定、お仲間さんが来たぞ？」

ガルグが見ているモニターにはリカ、ユリ、マーティンが写っていた。

「さて、道案内でもするか」

そう呟くと、ガルグは1つのスイッチを押すのだった。

3人はリーダーに出る反応だけを頼りにひたすら樹海を突き進んでいた。道しるべになるものも、ワタルがいそうな雰囲気もない。だが、リカはここでワタルがいなくなってしまうとは思って、全員を動かせる人がいなくなってしまうと思い、何かなんでも見つけてやろうと思った。

そして、ワタルもスーツからの反応が1番近い場所に到着したが…そこには何もな

かった。

「何もない？どういうこと？」

狼狽えていると、突然3人の足元が地面に沈んでいく。

突然のことで3人ともバランスを崩して倒れるが、それよりも今起きているこの状況を理解する方が大変であった。

「これは☒」

「秘密基地？でも…こんなものが20000年も経って残っているはずが……」

リカとユリが狼狽えていると、どこか思い出したかのようにマーティンは独り言を呟き出した。

「これは…ナノメタル？まさか、まだ残っていたのか☒」

『その通りだよ、マーティン博士』

突然放送が入り、その声の主にマーティンは驚く。

「ガルグ☒ガルグなのか？」

『もう数十秒で会える。他の者も呼ぶがいい。俺は……再び……』

ガルグは放送の中で、少し興奮を抑えながらも言うのだった。

『この星に希望を持ってきた』

その頃、スペースゴジラは自らが住みやすく出来るように土地を変貌させていた。険しく立っていた大地はスペースゴジラの手で意図も簡単に崩れ落ち、真つ平らになっていく。

その上に肩から生成された結晶を振り撒く。

もはや奴がいるところは地球の環境とはまるで別次元の世界のようだった。その結晶に入ったセルヴームは閉じ込められ、エネルギーを吸収されて死んでいく。そのエネルギーはスペースゴジラに供給され、更なる力を付けていく。

スペースゴジラは…ゴジラ・アースを倒すつもりだ。

先程の戦いから今の状況では有利ではあるが、手負いにする程度しか出来ない判断したからだ。

だが、奴は焦ることはない。

ゆつくりと…着実に体内にエネルギーを蓄えていくのだった。

そして…ゴジラ・アースも、まだ見ぬライバル…というより宇宙からの侵略者に大志を燃やしていた。海の中を高速で泳ぎ、身体に幾度となく岩石が衝突する。

ゴジラの目的はひとつだけ……。
スペースゴジラを、殺すことだ。

第10話

リカたちが乗っているエレベーターは数分後に最下層に到達した。

目の前には大柄な男が立っている。出で立ちには明らかにビルサルドの人間だと分かるのだが、どこか人間でない気がした。

理由としては、まず彼の身体の表面がまるで液体のようにサラサラと動いていることだった。マーティンもその事に気付くと、声を荒げながらもガルグに聞いた。

「ガルグ！君の身体はナノメタルなのか☒」

「当たり前だ。ゴジラの分子運動による熱エネルギー攻撃を受けては生身の身体は融けてなくなってしまう。だが：ナノメタルなら話は別だ。立ち話もなんだ。奥へ行こう」

ガルグがそう言うので、リカとユリは彼の後を歩いていく。すると、マーティンが取って加えるようにリカとユリに耳打ちした。

「気をつけたまえ……」

「え？あ……はい」

リカは何が危ないのか：何を気を付けなければいいか分からなかったが、マーティンがそう言うのだから、このガルグというビルサルドは危険なのだろうかとも考えてしまうの

だった。

3人は歩きながらも驚かざるを得なかった。

この地底基地は3人が考える以上に巨大だった。今歩いている通路も、横に並べば6人は通れそうさ。しかも透明となつている窓ガラスから外を見ると……巨大な洞窟を一掘削へくつさく《し、更なる侵食を進めているナノメタルが見えた。下には白いガスが溜まつており、この下が如何に危険かを物語っていた。

「君たちの目的であるワタルはここで寝ているよ」

ガルグがボタンを押すと、リカたちの前に上半身に包帯を巻いてぐつつすり寝ているワタルの姿があつた。

「大佐！無事だったのね……！」

ユリはホツと胸を撫で下ろす。リカも溢れそうに涙を堪える。

マーティンも生きていたと分かり、ホツとするやいなや、ガルグの方に向き直つて厳しい表情を作つた。

「それで……今回は何が狙いだ？」

「狙い……とは……？」

「惚けないで欲しい。君たちビルサルドは1年前、僕たちを強制ナノメタル化しようとして、地球をも自分らのものにしようとしたではないか☒」

それを聞いたリカとユリはゾツと背中に悪寒が走った。

ビルサルドがそんなことをする種族なのかと差別意識まで生まれそうになった。

だが、その事に関してガルグは…なんと、頭を下げて…。

「あの時のことは……すまない。我々はゴジラを倒すことだけに固執し過ぎていた。あの時君たちの同朋を殺してしまったことに関しては謝罪する」

「…そんな風に言われるとは思ってなかったな…」

マーティンは想定外だと言いたげな表情で頭を搔いた。

「それよりも……あいつはどこに行ったんですか？」

「あいつ……とは？」

「暗い青色の鱗に肩から生えた巨大な水晶を持ったまるでゴジラみたいな奴よ！そいつが部隊の大半を……」

全滅させたと続けたかった言葉はガルグが突然、肩を掴んでリカを揺すったことで止められた。ガルグは今まで以上に冷静さを失っていた。

「な、なんだと☒今の特徴は本当のことか☒」

「え……ええ……」

ガルグのあまりの焦燥にリカは驚いてばかりである。

ガルグは頭を抱えてどうしたものかと考え出す。そしてここでマーティンがガルグに聞いただす。

「あのゴジラに似ている怪獣について…何か知っているのか？」

「それは俺が説明しよう」

どこからその声かと思えば、3人の前からナノメタルが迫り出して、人型になっていく。同じくビルサルドだ。

「べ、ベルベ…！」

「驚くことはない。俺も生きていただけだ」

「マーティン博士…この人は？」

ユリは堪らず質問する。

「ベルベ…同じくアラトラム号の船員だった」

「そちらに地球人、よろしく。で…話を戻そう。君らが見たゴジラに似た怪獣…そいつは我々の母星『ビルサルディア』を破壊した奴だ」

その事実を聞いた3人…と、もう1人…。

「その話…詳しく聞きたいな…」

弱々しい声にリカは即座に反応した。

目の前の扉には、身体を引き摺りながらも必死に動かすワタルの姿があった。フラフラな足取りなため、すぐに倒れそうになる。

それをリカが支える。

「大佐！無事で良かったです！」

「リカか…。迷惑をかけたな…」

「大丈夫なのか？身体は」

「このくらいでバテたなんて言っていられるか。構わず続けてくれ」

ベルベは頷く。

「しかし…君らの星はブラックホールに飲み込まれたって…」

「博士、そのブラックホールを作り出したのがあの怪獣なんだよ」

信じられなかった。

星を飲み込むレベルの大きさのブラックホールを生成するなど、もはや次元を超えたものだと思えた。

「奴……名付けるならゴジラから取って、『スペースゴジラ』、は星からエネルギーを確保して生きているんだ。だが我が母星にはそんなエネルギーは有していなかったから破壊されたのだ」

「ということとは…スペースゴジラはこの地球上全てのエネルギーを取り終えたら…あん

たらの星と同じ運命を辿るってわけか…」

この事実にも全員が言葉を失う。

ただでさえゴジラー体だけでも、大変なことだといふのに、スペースゴジラまで…と思ってしまう。

しかし、そんな絶望感漂う中でガルグが言う。

「言っただろ？希望を持ってきたと」

「ガルグ、何か案があるのか？」

「恐らく…スペースゴジラは今どこかでエネルギーを補充しているはずだ。そこを叩くんだ」

「どうやって？」

リカが問う。

「もう一度メカゴジラを作る」

ガルグの発言に周囲は一瞬静まった。

少しの間を置いて、ユリが聞いた。

「メカゴジラをもう一度完成させたら…スペースゴジラは倒せるんですか？」

「スペースゴジラだけでなく、ゴジラも倒せる」

そう断言するガルグ、隣にいるベルベも自信満々のように見えた。

しかしワタルは……。

「…なんでそう言い切れるんだ？」

「大佐？」

様子がおかしいワタルにリカが顔を覗き込んで聞く。だが、リカの言葉は耳に入っていないのか、勝手に話を進める。

「あんたらは20年前もメカゴジラでゴジラを倒せると豪語してたよな？それでまたそう断言すんのか？全く変わらないな、ビルサルドは!!？」

ビクツとリカの身体が震える。

「…あの時はメカゴジラが作動しなくなっただ。だが今から考えれば、メカゴジラはあの状況でゴジラに勝てないと判断して作動しなかったんだ。だが、20000年経った今なら…」

「しかし…ガルグ、1年前も同じ結果に…」

「だがメカゴジラは生きている。問題はない」

「それは…死んだサカキ大尉やユウコ少尉に言えるのか？」

マーティンの言葉にガルグは一瞬言葉に詰まり、視線を逸らした。

またサカキの名が出たことにワタルは少し気になった。

この3人を導いたサカキ大尉とは一体…。

「とにかく、まずはスペースゴジラを見つけてることが先決だ」

「それには賛成だ。奴が何をしているか見つけなと…」

スペースゴジラを見つめる……このことだけは満場一致した。

しかし、ワタルが抱えているビルサルドに対する不信心は消えていない。これが後々響くことがあるのではなからうかと……リカとユリが思っていると、突然地面が激しく揺れ始めた。

「な、何？」

「またゴジラか？」

ガルグが外のモニターで確認すると、山も何もないところから突然溶岩が噴き出し、樹海を燃やしていたのだ。

「噴火☒ここは活火山はないんだぞ？何故だ？」

「…スペースゴジラだ！奴の影響がもう始めているんだ！」

ワタルは外の様子を見ながらも、こう呟くのだった。

「もう…ツベコベ言っている時間はないってわけか…」

第11話

ミアナは見張り台から嘖き上がる炎の柱を見ていた。

彼女たちはあんなものを見たことがないため、ただ眺めているだけであつた。しかし、何故あんなことが起きているのか、それは理解している。

結晶を纏つたゴジラのせいであると…。

もし：アレもゴジラと同属か眷属けんぞくであるものならば：何をやっても全て炎の海に沈むだろうと：ミアナは静かに思うのだった。

あらかたの説明を受けたワタルたちは、では、どうやってスペースゴジラを倒すのか聞いてみた。

「で、奴を倒す手段はないのか？」

「我々が記録した限り、奴の体表はゴジラ程硬くもないし、再生もしない。だが、その代わり非対称性透過シールドだけは健在だ。どこかにシールドを増幅させる場所があるはず。しかしその部位は分からん」

「では…最初のゴジラを倒した時と同じ作戦で行けるかも…ってことですか？」

「理論上だ。1年前もそう思ってたんなら無様にやられたからな。なあ、マーティン？」

「……………」

マーティンはこの瞬間僅かな苛立ちを感じた。

あの時、ゴジラが分子運動によつて超高熱を放出し出した途端にビルサルドが本性を現したことを今でも忘れない。無理やり隊員を強制ナノメタル化し、逃げれば助かるはずの命を消したのだ。

その犠牲にハルオが一番気にかけていたユウコもいたことも…。

「スペースゴジラがいる場所はどうかやつて調べる？」

「簡単な話だ。奴もゴジラ同様放射能を出している。ナノメタルで探査機を作つてその足跡を辿ればいい」

「だが、準備は他にもあるだろ？」

「もちろん。スペースゴジラ…ゴジラ共々倒せるようなメカゴジラを作成する。まあ、もう入っているがな」

「何だつて☒」

「作成期間は？」

「2日つてとこだ。同時に揚陸艇もコンバートする。そうすれば如何に遠い場所にいた

としても、即座に着ける」

ナノメタルがここまで凄い金属物質なのかとワタルもリカも驚いた。しかし、この金属でさえ勝てなかったゴジラはどれほどの力なのか…想像もつかなかった。

「とにかく今は休め。来たる時に身体が動かなかったら意味がないぞ?」

それを聞いて、リカは徐々にワタルの身体が重力に従ってずり落ちていくのが分かった。これ以上立たせるのは無理だと思ったりリカは即座に先程ワタルが出てきた部屋に入って、彼を横にさせた。

「ふつ、ワタルもハルオと同じようにいいパートナーがいるではないか」

「…そうだな」

こんな会話をしていることにリカは気付いていない。

「大佐、無理せず安静にしてください。これから私が食事もしますから」

「俺を介護するつてののか? いいよ、俺は……」

上体を起こそうとしたが、未だに身体に鈍い痛みが残る。

「ほら、寝た寝た!」

リカに上半身を押されて金属質のベッドに横たわるワタル。口からは「はあ」と溜息

を吐き、大人しくする。

リカはワタルの傍に座り、遠い昔の本を機械で読み出した。

題名はゴジラとの戦いで消失してしまったが、これがなかなか面白くて読み出したらハマってしまった。

そんな感じで数時間、静かな時間が流れると、不意にワタルが口を開いた。

「なあ……リカ」

「何ですか？」

「俺は……正しいのかな？」

その問いに、リカは即座に答えられなかった。

「ゴジラを倒す……それが俺の生涯の目標だ。だけど……みんなをここに導いて戦うことは、本当に正しかったのか……。今となっては、『負け』も1つの手だと思うんだ」

「……ゴジラと共存する……ということですか？」

「違う。あいつと共存なんか……」

「でもフツアの民は共存……というの分かりませんが、ゴジラとは敵対関係ではありません」

そう言われて、ワタルは黙ってしまふ。

「双子の片割れが言っていました。『戦うの、負け。負けるの、勝ち』と……」

「負けるのが…勝ち…」

ワタルにはその双子の片割れの言葉を理解出来なかった。

負けたら虚無感が残るだけで、勝利の余韻もあったものではない…と。しかし、あのゴジラの圧倒的な力の前で、自分たちは立ち向かうことが出来るのか…。

そんなことを考えていると、再び疲れか傷が癒えていないのか、寝入ってしまうのだった。

その頃…ゴジラ・アースはスペースゴジラの居城に乗り込んでいた。

至るところに水晶が蟻地獄のように連なり、セルヴァムや植物…果てにはその場にある空気をも吸収していた。

その真ん中で、スペースゴジラは待っていましたと言いたげに鎮座していた。

その姿に怒りしか覚えなかったゴジラは、すぐ様背びれに電撃を蓄積して、熱線を放出した。だが、熱線はスペースゴジラの少し前でバリアみたいなので反射し、一本だった熱線を数本に分裂させ、ゴジラに一部命中させた。

ゴジラは自らの熱線を受けて、足を後ろに後退させた。

そこに迫り撃ちをかけるように奴は湾曲した黄色の熱線を吐き、ゴジラの身体に命中

させていく。非対称性透過シールドを展開しているものにも関わらず、スペースゴジラの熱線は意図も簡単に突き抜けていく。

とうとう耐えられなくなったゴジラは足の力が抜けて、地面に倒れた。倒れるだけでも天災を起こすのではないかと思うほどの地震を作り、周りの結晶を破壊していく。

スペースゴジラは配置した結晶からエネルギーを得て、肩に付いている巨大な結晶に更なるエネルギーを蓄える。

そして、肩の結晶から重力場を操るエネルギーを出し、10万トンもの質量を持つゴジラの巨体を難なく持ち上げると、そのまま結晶で作られた蟻地獄に閉じ込めた。

ゴジラは出ようと熱線を吐き、身体を暴れさせるが、忽ちエネルギーを奪われ、徐々に大人しくなっていく。

これにより、勝ちを確証したスペースゴジラは天に向かって咆哮し、電撃熱線を至る場所に降り注がせるのだった。

卵の前で祈りをしているマイナに、何か：大きなものが消え失せようとしているのが感じ取れた。ここから遠く離れた場所であるが、それが何なのかは分かる。

ゴジラだ。

結晶を纏ったゴジラにやられたのか、それとも…何か別のことが起きているのか…。

何にせよ、このままではフツアの民も…ハルオたちと同じようにやって来たワタリガラスも皆死に行く運命だけは変わらない。

そうならないためにはどうしたら良いか…。

ハルオと命を繋いだこの子のためにも…マイナはまだ死ぬわけにはいかなかった。彼の命も無駄にしないために…。

ミアナは卵に手を当て、再び祈りを捧げるのだった。

第12話

ガルグ、ベルベ、そしてナノメタル化した他のビルサルドたちはコツコツと最新のメカゴジラ建設に時間を費やした。その間にも天変地異は続き、基地の近くに新たな活火山が出来てしまう程だった。

ワタルたちは焦りを隠しながらも、早くメカゴジラが出来ないかと待ち続けた。

その退屈凌ぎにコンバートされた揚陸艇の中を彷徨っていたが、今までとは比べられないくらいに機能が大いに向上、巨大化していた。

まずサーモバリック爆弾を積んでいたところには何台ものヴァルチャーが置かれた。他にも高射砲台が至るところに設置されており、空中でセルヴアムの大群に襲われても問題ない設計になっている。

揚陸艇の改造具合にワタルたち人類は舌を巻いてしまう。

そして2日後…ビルサルドが納得するメカゴジラが完成したとの報告を受けたワタルは基地に戻った。

「出来たのか☒」

「ああ！スペースゴジラの居場所も分かっている。あとは…決戦の舞台に向かうだけ

だ」

「だけど……どうやってこんな巨大な金属の塊を運ぶ気だ？」

そう……ワタルたちの前には既に完成されたメカゴジラが鎮座しているのだが、大きさはあのゴジラと比肩する。これを持ち運べるのかと思ったマーティンだが、ガルグは余裕の表情を浮かべたままだ。

「心配する必要はない。揚陸艇から吊るせばいいだけだ」

「それで行けるのか？」

「私を信用しろ」

そう言つてガルグは先に改造した揚陸艇の方へと向かつてしまった。

「大丈夫……なんででしょうか？」

「信じるしかない。俺たちも行くぞ」

ワタルはすぐにガルグの後を追つていく。

しかしリカから見て、彼の後ろ姿に迷いは無いように思えるのだった。

揚陸艇は地下基地から迫り上がるようにして、地上に到達した。

そこから揚陸艇はエンジンを最大出力で上昇し、メカゴジラを金属の鎖で繋いだ。

乗っている人類の大半は持ち上がらないのではと思っていたが、そんな心配はすぐに無くなった。

体高300mオーバーのメカゴジラは軽々と宙に浮き、揚陸艇と共にスペースゴジラの元へと出航する。出航と言うが、この揚陸艇を運転する者はいない。これも全てナノメタルが動かしているのだ。

「それで…到着までどれくらいだ？」

「すぐだ。亜空間航行を可能にしたのだ」

「そいつは凄い」

ワタルはここまでの技術までこの船に入れているとは思わず、自然と笑ってしまった。

「これも全て…ナノメタルのお陰だ」

すぐに船の中にエンジン音が高く、回転が上がっていく音が響き、窓に映る景色もオラティオ号で見たものと同じようになる。

そして一瞬の間に景色は一変し、彼らの前にスペースゴジラが現れる。だが、奴がいる周りの地形はもはや地球でありのかと疑いたくなるようなところだった。

平坦だったであろう地面は大きく抉れ、小高い崖を無数に形成し、水晶を蟻地獄のようにならべていた。そのせいか分厚い雲はなく、ここだけ太陽が出ていて、非常に眩し

かった。

「……こいつは驚きだ。たった数日の間でここまで地形を変えてしまうとはな……」
「要するに1ヶ月もあれば地球はこいつに好きなように変えられるってわけだ」
「よし、メカゴジラを投下だ!!？」

ガルグの命令に従って、揚陸艇と繋いでいる鎖は解き放たれ、スペースゴジラと同じ地面に降り立った。

スペースゴジラは目の前に立った金属質のゴジラに完璧な敵意の視線を向けていた。尻尾を何度も地面に叩きつけ、相手を威嚇したが、機械の心しか持たないメカゴジラは赤く発光する目を向けたまま微動だにしない。

それに苛立ちを覚えたのか、スペースゴジラは電撃熱線を放出する。熱線はメカゴジラの身体に命中し、片腕と腹の一部が大きく破損した。だが、メカゴジラは身体から更なる液体状のナノメタルを浸み出し、破損した部位を一瞬にして再生させてしまった。

その様子を見ていたスペースゴジラであったが、構うことなく更に熱線で攻撃する。メカゴジラはというと、身体の間隙からナノメタル粒子を放出させ、熱線を捻じ曲げて逆にスペースゴジラに当てた。

「あんなことも出来るのか…」

「あれだけじゃない。我々が作ったメカゴジラはな、ゴジラに対抗するためだけに特化して他にも強力な攻撃方法を有している」

ガルグに言ったことに応えるかのようにメカゴジラは頭部を変形させ始めた。砲台のように長い形状に変化し、それをスペースゴジラに向ける。砲台には赤い粒子が蓄積されていき、ゴジラが熱線を撃つ時のように背びれが順番に染まっていく。

あれはメカゴジラ計画発案書に書いてあった攻撃方法だとワタルには分かった。

通称『荷電粒子攻撃』

スペースゴジラは自身の熱線が胸に当たったことで少しだけメカゴジラから視線を逸らしていたために何をしているのか、判断が一瞬遅れた。視線を戻した時には、荷電粒子は熱線となり、赤い光線がメカゴジラの腹部を貫き、激しい爆発を引き起こした。

爆風は周囲の地面を隆起させ、揚陸艇にまで衝撃波は飛んで来た。

「凄い！大佐、これならスペースゴジラもゴジラも…！」

リカは興奮気味でそう言うが、ワタルはそんな簡単に殺せるものではないと分かっていたから何も発することはなかった。

と、ここでマーティンが窓にべつたりと張り付いて一点をよく見詰め出した。

「博士？どうしたんです？」

「アレを見たまえ！あの水晶の檻に入っているのを…!!？」

博士指差す先には結晶の蟻地獄があった。そしてその中には、黒い背びれが姿を見せていた。あれが何なのか…：分からない者などいるはずがない。

「ゴジラだ！スペースゴジラに負けて、恐らく閉じ込められたのだろう」

「でも…おかしくないですか？あのゴジラなら、やろうと思えばすぐに水晶を破壊出来ると思うんですが…」

「確かに…」

博士も何故か悩んでいると、スペースゴジラが吼えた。

途端に肩の結晶が発光し、地面にある結晶も同じように光り、肉眼でも見えるくらいの電気エネルギーの供給を開始した。

その影響か、スペースゴジラの背びれは白色から黄色になり、腹に空いた穴も即座に再生した。

「分かったぞ！スペースゴジラはこの結晶にエネルギーを蓄えておいて、そこからエネルギーを得ているんだ。ということは閉じ込められたゴジラは中でエネルギーを奪われている可能性がある」

「それなら…：ゴジラはあそこから出さない方がいいな…。スペースゴジラに大量のエネルギーを奪わせてゴジラ共々倒すでしょう」

ガルグはそう言う。

これに反対の者はいない。なんせ、こんなチャンスはないかもしれないからだ。

それを理解したのか、メカゴジラはゴジラが閉じ込められている結晶から離れさせるために、脚部に付いているエンジンを稼働させ、スペースゴジラを捕まえて少し遠くに運ぶ。

多少遠くてもスペースゴジラはエネルギーを得れるから問題はない。

暴れるスペースゴジラだが、機械の腕に掴まれては逃れられなかった。

「よし、このまま圧倒して殺してしまえー」

メカゴジラは脚部のエンジンを停止させ、スペースゴジラと距離を取ると尻尾の先端の刃を高速回転させる。上半身を低くして、尻尾を高々と上げると、回転した先端の刃をスペースゴジラの首目掛けて振り下ろした。

これで殺せる……今まで圧倒的に優勢だったメカゴジラが負けるはずがないと思っていたガルグ率いるビルサルド。

しかし：回転刃はスペースゴジラの身体の前で何かに引つ掛かったように突然停止した。その原因は結晶から放たれた非対称性透過シールドだった。

しかもただのシールドではない。止まった尻尾の回転刃を戻そうとしても、メカゴジラは己の意志で動かすことは出来ず、何かに引き千切られる形で壊れた。

「な、何だ？」

更には尻尾だけでなく、メカゴジラの身体自体が動かなくなった。まるでメカゴジラが立つ場所だけ重力が何倍にもなったかのようだった。

ギギギと金属と金属が擦れる音が響く。

そして、スペースゴジラが天に向かって2度吼えようと、不意に白みがかかった空が朱色になり始めた。メカゴジラだけでなく、ワタルたちも空の方を向くと、上空からは信じられない『もの』が落下して来ていた。

「おい！嘘だろ」

「そんな…これが…一つの怪獣が成せるものだっていうの」

船員たちはスペースゴジラの更なる力に声を震わせた。

降って来ているのは、隕石だった。大きさは恐らく直径1kmはあるだろう。あんなのが直撃すれば、いくらメカゴジラとは言え大したダメージでは済まされない。

だが、隕石が落下してくる前にメカゴジラは最後の抵抗と言うべきなのか、両腕に砲台を作り出し、小さな荷電粒子を光弾にして発射した。2つの赤い光弾はスペースゴジラの両肩の結晶の内の1つに命中し、破壊した。

スペースゴジラは肩の結晶が破壊され、痛みによってか大きな雄叫びを上げた。

するとメカゴジラの動きが少しだけ良くなり、隕石落下前にほんの少しだけ右に避け

ることが出来た。だが、メカゴジラの左側に隕石が命中し、頭部も含めて左側が全て失われてしまった。

肩の結晶を壊されたスペースゴジラは怒りによってなのか、肩の結晶や頭部の十字結晶、目まで煌々と紅く煌めきだした。

そして、壊れている肩の結晶も含めた両肩の結晶から電撃を放出して周りに設置された結晶を浮遊させ、メカゴジラに向けて投射した。

身体の半分を失ったメカゴジラはこの攻撃を防ぐ事も出来ずに、結晶攻撃をもろに受けてしまう。残った右半分の身体もほぼ全壊し、メカゴジラの身体は遂に頭部と脚部だけになってしまう。

「……クソ!!? スペースゴジラめ……!」

ガルグはそう悔しそうに声を荒げた。

メカゴジラの目はまだ赤く輝いていたが、既に攻撃手段を全て損失したメカゴジラを攻撃すると気はもうスペースゴジラにはなく、今度は揚陸艇に目を付けた。

「マズイ! 急いでここから離れるんだ!」

ガルグはそう叫んだが、時既に遅く、スペースゴジラは電撃熱線を確実に当てるために、揚陸艇の周りの重力を操って、緊急離脱させないようにした。

「間に合いません!」

「ナノメタル粒子散布!!? 奴の攻撃をなるべく防ぐんだ!」

ガルグが命令するなり、揚陸艇前部にナノメタル粒子が放出される。

これによって電撃熱線は跳ね返すことは出来たが、そう何度も同じ手は使えない。

ガルグは今が攻撃を防いでいるが、この後どうするかを必死に考えていた。メカゴジラを破壊された今、攻撃手段は揚陸艇に付いている高射砲台と整備されたヴァルチャーしかない。これではスペースゴジラから逃れることはおろか、立ち向かうこともままならない。

そんな時、ワタル1人どこかへと走り出す。

「大佐☒」

ワタルは激しく揺れる揚陸艇の中を必死に駆けて、ヴァルチャーが保管されている倉庫へと急ぐ。

ヴァルチャーに乗り込んだワタルはエンジンを起動させ、単独で揚陸艇から飛び出した。初めての操縦で慣れず、上手く飛ばせずにいたが、すぐに慣れていき、真つ直ぐ飛ばせるようになった。

暫くして…ガルグやり力から無線が入った。

『大佐!!?』

『ワタル!!? 何をするつもりだ☒』

ワタルの口から飛び出した発言は…信じられないものだった。
「ゴジラを解放する!!？」

第13話

ヴァルチャーから聞こえてきたワタルの返答に誰しも驚いた。

今、ゴジラはスペースゴジラによつて結晶の蟻地獄に閉じ込められ尚且つ、体内のエネルギーを奪われている。このままスペースゴジラに生きてもらい、エネルギーを使い続けさせれば、もしかしたらゴジラは絶命するかもしれないのだ。

それなのに……ワタルは理解してないのか、『ゴジラを解放する』など馬鹿げたことを言い出したのだ。もちろんガルグは猛反論した。

「何を言っているんだ☒今解放すればゴジラとスペースゴジラは闘い、どちらかが死ぬがその代わりに俺たちが次のターゲットになるのだ!!?それを理解しているのか☒」

『してる!してないはずがない!!?だが、メカゴジラが破壊された以上、今はゴジラを解放させて奴に賭けるしかないんだ!……少し癪しゃやくだけだな……』

「……言いたいことは分かる。だが今は引き返して、次の機会にしろ!またメカゴジラを作れば……」

『あんたらはいつもそうだ!』

唐突にワタルは怒声を上げた。

これには流石にガルグも虚を突かれたか、少しだけ身体をビクつかせた。

『ビルサルドのやり方はいつも論理的で効率的だ…！そんなこと言つて、それが100%正しかったことなんてあるか？オペレーション・エターナルライトも…ロングマーチもだ…？メカゴジラ作製の時間稼ぎやらなんやら…。ふざけんのも大概にしろ…？俺たちがここにいるのは何のためだ！ゴジラを倒すためだ…？主戦力が損失しただけで逃げ帰るなんて、弱い奴がすることだ！』

ワタルの言つてゐることは滅茶苦茶だった。

滅茶苦茶なことには変わりはない…はずなのだが、彼の意志がとても詰まったこの発言は揚陸艇に乗つてゐる隊員の大半の心に深く刻んだ。

『今回はもう逃げない。ゴジラに背を向けるのはもう散々だ。俺だけでも戦う』

そう宣言するワタル。

自分でもよく言えたものだと感じたくなった。ゴジラよりも恐ろしいスペースゴジラを周回しながら言つてゐるから尚更だった。

反論する者もいる…そう思つてゐると、リカの声がワタルの無線から聞こえた。

「大佐！大佐の言う通りです…？もう逃げるのは終わりです！ゴジラを…解放してくだ

さい！」

『リカ…』

「そうだ！逃げ続けるのはもう嫌だ!!？」

「戦うんだ！」

リカに続いて様々な声が聞こえた。

自分が勢いだけで言ったことにこんなに賛同してくれる人がいるなんて思っていなかったため、少しだけ目頭が熱くなる程嬉しかった。

この様子を見ていたベルベは溜め息を吐いた。

「やはり……地球人は好戦的種族だったか……。嫌いではないが……」

「……ワタル、あとは任せる。俺たちはナノメタルでエンジンを強化する！それまで時間稼ぎを頼む」

最初は反対していたガルグもワタルの考えに賛成してくれたようだ。

ワタルは『分かった』と答えると、ヴァルチャーのエンジンをフル出力にして、スペー
スゴジラに向かっていく。

ヴァルチャーの翼は大きく開き、噴射口から紫色の炎が複数個出ている。それがス
ペースゴジラの目に入り、電撃熱線を放とうとしたが、破壊された肩の結晶から暴発し
て上手く吐き出せずに散発する。

しかしそれはそれで、熱線が一本から複数になってしまったため厄介になってしまっ
た。

ワタルはゴジラが閉じ込められている結晶に向かうが、散発した電撃熱線を避けながら向かうのは骨が折れそうだった。ヴァルチャーの大きさでは、ゴジラだろうとスペースゴジラだろうと熱線を食らえば一撃で撃墜されてしまう。

そう分かっているが、回り道をして向かうのは揚陸艇を墜落される可能性が上がってしまうため、その行動は取れない。

ワタルは死ぬ覚悟の上でスペースゴジラの方に向かい、奴の脇腹の辺りを避けつつ、ゴジラに向かって砲撃した。奴を閉じ込める結晶を破壊していくが、ワタルの乗るヴァルチャーの1機だけでは全てを破壊することは出来そうもないと思われた。

が、ここでワタルの背後から数発の砲撃が飛んで来た。振り向くと、そこにはワタルと同じヴァルチャーが飛んでいた。

「☒誰だ?」

『私です!!? 大佐!』

「その声…まさかリカか☒」

どうしてリカがとワタルは思ったが、今はそんなことを考えている余裕もない。だからワタルは怒りを彼女にぶつける前に、指示をした。

「…よし！リカ！やることは分かっているな?」

『はい!!? ゴジラの周りの結晶を破壊するんですね!!?』

何をするか分かってているリカはやることが早かった。

ワタルよりも上手にヴァルチャーを操り、結晶を壊していく。

だがスペースゴジラもワタルたちがしていることをみすみす逃すようなことはしない。上手くエネルギーを操れないとは言っても、スペースゴジラからして蟻みたいに小さいヴァルチャーを落とすことなんて難しいことではない。

すぐさま電撃熱線を放ち、ワタルとリカの邪魔をする。

そこでリカは自殺とも思える行動に移る。

『大佐！私は奴を引き寄せるのでそのうちに…！』

「ふざけるな！そんなことが出来るか!!?」

『でもそうしないと私たち2人共撃ち落とされます！』

「……だが……」

『いいから早くしてください!!?』

リカの必死の願いにワタルは根負けした。

リカが真っ向からスペースゴジラに向かっていくとは逆にワタルはゴジラに向かっていく。

砲撃を繰り返していくうちに、ゴジラの周りの結晶が細かに震え始めた。もうじき、解放される……そう分かったところでワタルはリカに叫ぶ。

「リカ☒リカなのか☒どうやって脱出を…?」

『緊急……ザザザツ……を使った……です……! 私は……今……ガガガツ!!? 揚陸艇……の助け……待って……』

「分かった!俺もすぐ帰還する!」

ワタルはリカの安全が無事だと分かり、ホツとする。

そしてすぐにゴジラたちの側から逃げる。

悔しいが、スペースゴジラを倒す最終手段であるゴジラ……奴に全てを託して……。

ゴジラはスペースゴジラが倒れた後でも構わず熱線を吐いた。

スペースゴジラはそれを食らってたまるかと言いたげに、非対称性透過シールドを展開し、ゴジラの熱線を弾き返そうとする。

しかし、肩の結晶の損傷の影響で上手くシールドを作れず、最初は弾き返すような予兆があったが、すぐにゴジラの熱線の勢い……威力に負けて、スペースゴジラに直撃する。熱線はスペースゴジラの肩に風穴を開けて、奴を苦しめた。

更に間髪入れずに第2波の熱線を撃ち込むと、今度はもう片方の肩の結晶に熱線が直撃して、粉々に打ち砕かれた。

そのせいか、完全にエネルギーを操れなくなったスペースゴジラは体内に蓄えられていたエネルギーが拡散し、それが2体のゴジラの周りに漂う。

このエネルギーは皮肉にもゴジラの力を更に高める要因となつてしまった。背びれにエネルギーが吸収され、青い電撃は真紅の電撃へと色が変化した。

そしてエネルギーを余すことなく、赤色の太い熱線を撃つてスペースゴジラの胸部にぶち当たる。奴の胸からは血が噴き上がり、スペースゴジラは苦しそうな咆哮を上げるばかりで、ゴジラの攻撃を何も防ぐことが出来なかつた。

何度熱線を当て、最後にゴジラは尻尾を地面に叩きつけ、下半身に力を込めると、勢いそのままに一気に尻尾を振り抜いた。尻尾が動いた軌道上に赤い斬撃が飛び、スペースゴジラの首に当たつた。

スペースゴジラは目を丸くさせて、身体を硬直させた。

数秒だけスペースゴジラは固まっていたが、すぐにその首はずりりと落ちた。

スペースゴジラの死を見取つたゴジラ・アースは地球上全てに聞こえる程の大きな雄叫びを高々と上げるのだった。

ゴジラがスペースゴジラを殺した瞬間を見ていたワタルやマーティン、ビルサルドは

一言も言葉を発せなかった。

ゴジラ・アースの圧倒的な力の前に、勝てるのか…と何度となく思ってしまったのだ。最強のメカゴジラを作ったビルサルドでさえ、そう思ってしまったのだ。

勝利の咆哮を上げているゴジラだったが、すぐに顔を俯かせて、身体を硬直させていった。マーティンはこの状態をメカゴジラシティー破壊の時に見た以来だった。

「あれは？」

それを知らないワタルは誰に聞くわけでもなく、そう呟いた。

「エネルギーを大量に消費したから、眠っているんだ」

「…そうですか…」

それなら今叩けば倒せるかもしれない……。

そんな考えが思いついたが、ワタルはおろか、誰も今奴を攻撃しようと思った奴はいなかった。

威圧感、荘厳としたゴジラ・アースの前にワタルたちは萎縮してしまっていたのだ。

「…一時帰還するぞ。メカゴジラの更なる改造と強化をする」

「…そうしてくれ」

力なく、ワタルは言った。

そんな弱々しい姿を、リカは横から見ていて、寂しくなるのだった。

スペースゴジラが結晶を身体に纏って落ちてきた場所はまるで隕石が落ちたかのようには巨大なクレーターが出来上がっている。その一角にはポツンとそれなりの大きさの穴が空いていた。

その穴の中を寝ぐらにしようと、ワーム型のセルヴァムが集まっていた。更にそのワーム型セルヴァムを狙おうと、翼竜型も上空から狙いを定めていた。

しかし、ワーム型が入ろうとした時、紅い足がワーム型の身体を意図も簡単に突き刺した。足に突き刺したまま、穴から出てきた紅色の生物は、ワーム型の腹に口を付けて、エネルギーを吸収した。

それを見ていた翼竜型セルヴァムは、ワーム型からそいつに狙いを変更した。勢いよく降下して、奴の身体を後ろ足で掴んだが、重くて持ち上がらなかつた。

何度も翼を羽ばたかせても、奴の身体が地面から上がることはない。そうやっている、側面から紅色の足が翼竜型セルヴァムの翼に食い込み、地面に叩きつけると、口を首元に付けて、何かを注入とエネルギー吸収を同時に行った。

穴から出てきた紅色の生物は一匹だけではない。

数え切れない数がクレーター内に集結し、不気味な目を光らせる。

奴ら『破壊者』はまだ…動き始めたばかりである。

3章 二体目の破壊の王、顕現（けんげん）

第14話

ユリは退屈にフツアが住んでいる洞窟で待ちぼうけを食らっていた。

自分も一緒にゴジラを倒しに行きたいと申し出たが、誰かがここに残らないと『もしも』の時にどうすることも出来なくなるから……という理由でユリを含めた一部の隊員が残った。

ワタルやリカ、ナノメタルの身体になったビルサルドは今頃どうしてるのだろうか……とユリは思った。

ゴジラの恐ろしさはつい最近になって分かった。

老人や年上から聞くだけではあまりイメージが掴めなかったが、実際に見て、その力の差を見せつけられると、一番最初に戦いを挑んだ人たちでさえ英雄に思えて来た。

あんな化け物を倒せるのか……。

ユリは見張り台からボケーと外を見続けながらそう思った。

と、その時、一機の揚陸艇がこちらに近付いてくるのが分かった。

一瞬、ワタルたちのコンバートしたものかと思っただが、あれはコンバートされてもい

ないし、何より片側のエンジンが火を噴いている。

「まさか……あれは……！」

間もなくして、揚陸艇は樹海の中に不時着していった。

ユリは数名の隊員を連れて、墜落現場に向かう。

樹海の一部は墜落の影響で崩れ落ち、とても生き残つてられる状況ではなかった。が、一番奥の脱出ポッドからガンガンと中から誰かが叩く音が聞こえた。

「おーい!!? 誰か……! 開けてくれ!!?」

扉の奥から聞こえる声は、聞き覚えのあるものだった。

急いで扉をこじ開けると、中からは黒い煙と一緒に堅いの良いビルサルドたちが約数名出てきた。全員満身創痍で、とても疲れた様子であった。

「ベルド中将……！」

「君は……ユリ隊員か……」

小さく弱々しい声でベルドはそう言った。

ユリは何があったのかを聞く前に、ベルドたちをフツアが住む洞窟へと運ぶのでつた。

―数時間後―

スペースゴジラ：そしてゴジラ・アースとの激しい戦いを終えて、一時撤退して来たワタルたちは、基地に戻るやいなや、倒れる形で椅子に座って頭を抱えた。

最新のメカゴジラでも、スペースゴジラを倒せなかった。

だが、ゴジラはそのスペースゴジラを最終的に圧倒し、意図も簡単に殺してしまった。スペースゴジラが深傷を負わせていたからと言えば、それはいいのだが誰もそうは言う気になれなかった。

そんな中、一人の隊員が、こんな発言をした。

「もう…地球を捨てるしかないのでしょうか？」

根本的な問いだった。

誰でも一度は考えてしまうものを、誰かが言ってしまったのだ。

ずっとゴジラを絶対に倒して地球を取り戻すと豪語していたビルサルドでさえ、即座に否定することは出来なかった。

ワタルも同じように返答出来なかったが、彼の中で『逃げる』の文字はなかった。

では何故そう言わなかったか…。そう言ったとしても、効率的な作戦が思い浮かんでいなかったからだ。

作戦のビジョンも見えないというのに、そんなことを言えるわけがなかった。

疲れ切ったワタルはフラフラと立ち上がり、個室の前へと向かう。

「大佐？」

「……各自、今日はもう休め……」

リカたちの耳に入ったワタルの言葉は、力、覇気を完全に失っていた。ワタルが個室に入ろうとした時、不意にワタルの無線がユリからの連絡をキャッチした。

「ユリか？ どうした？」

『大佐、大変です！ オラティオ号からの生存者を発見しました。現在、フツアの洞窟で休養させています』

その事を聞いた途端、ワタルの疲れは一瞬にして吹き飛んだ。

生存者がいた。

この事実がワタルの動かしただ。

「今すぐ向かう！」

ワタルは個室には入らず、すぐにフツアの洞窟に向かった。

他の者は何があつたのか分からず、茫然としていたがその後を追っていったのはリカだけで、他は地面に尻を付いたまま身体を動かすことはなかった。

ワタルとリカはフツアの洞窟に着くと、いつもと様子が違っていた。

この時間帯、ほとんどのフツアの民は就寝する時間なのに、今日はやけに起きている

人数が多い。

「どうしたんだろうでしょうか？」

「分からない。とにかく、先に生存者の話を聞こう」

ワタルとリカはユリたちの住まいの方に駆けていく。

その背中を……恨めしい表情でフツアの人たちに見られていることに気付かず……。

「あ、大佐！」

「生存者って、本当か？」

「はい、ビルサルドの一派数名だけです……。揚陸艇の脱出ポッドに閉じ込められていて……。しかも、中で火事になっていたらしくて、煙を吸って今はこんな状態です……」

ユリが暖簾を捲ると、確かにビルサルドだった。

サイボーグの身体を持つ彼らを見分けるなど、猿でも分かることだ。

「ん……ワタル……大佐じゃないか……」

弱々しい声を絞り出したのは、オラテイオ号ではビルサルドの頂点に立つベルドだった。サイボーグなのに、ここまでダメージを負うなんて……何があつたのかよく聞きたかった。

「ベルド中将、何があつたんですか？」

「……突然……大きな結晶の塊が、降ってきて……オラテイオ号に向かって来て……船は、紙細

工みたいにぐちゃぐちゃに……その前に……揚陸艇で脱出を……」

「なるほど……。逃げようとしたけど、スペースゴジラの引力か……オラティオ号の爆発に巻き込まれたか……」

「ち、違う……」

「「え？」」

ワタルだけでなく、リカも『違う』と言われて、声を出してしまった。スペースゴジラやオラティオ号によるものでこんなことになっていないとしたら……何が彼らにここまで重傷を……。

「アレは……地球の生物とは思えない……。だが、地球外から来たようには思えない……」

「……………」

ベルドの物々しい発言にワタルは背筋が凍るような感覚が走った。

地球に……また、恐ろしいものがある……。

その時、暖簾から子供を抱えてマイナが中に入って来た。

「ワタル、リカ……村長、大事な、話……ある」

「大事な話？」

マイナはコクリと頷く。

ワタルは数秒考えたのち、リカに頼み事をした。

「リカ、ユリと一緒に墜落した揚陸艇を調べるんだ。何か手掛かりがあるかもしれない」
「え、でも大佐は……」

「何の話か知らないが、重要な話っぽいしな。きちんと彼らの意見を聞いてくる」
「分かりました」

ワタルとリカ、そしてユリは暖簾を潜って別々に行動する。

暖簾が捲られた時、ベルドの目にナノメタルで出来た矢じりが目に入った。目を見開き、ナノメタルがここにあることに驚く。

だが、これでベルドが長年しようと思っていたことを実行出来ると分かると、彼は周りに聴こえぬよう小さく笑うのであった。

第15話

リカとユリは先にベルドたち、オラテイオ号からの脱出に使ったという揚陸艇の墜落地点に向かった。ゴジラやセルヴアム、そしてスペースゴジラでもない『何か』が、彼らを襲った。

ベルドの証言を鵜呑みにするなら、それで良いのだがユリはどうも釈然としなかった。何故なら彼女は救助に行った時、周りには何かがあったような痕跡も気配もなかったからだ。静かで：金属質の木が燃えるパチパチとした音しかしなかった。

そんな感じで半ば何もないと思いつつも、墜落地点に着く。

リカはこの惨状を見て、口に手を当てて驚いていた。それもそうだろう。

屑鉄の下に挟まれて動かせないビルサルドの死体がまだ残ったままだし、それを食べるワーム型セルヴアムが群がっていたからだ。

ユリもこの光景を見て、良い気持ちはしないがいつまでも狼狽している場合ではない。

ワタルに言われた通りに、セルヴアムやゴジラ以外の生物が攻撃した形跡がないかを探し始める。

しかし、機体の大半が吹き飛び、ここにはほとんど残っていない。焦げた機体しかないのに、どうやって痕跡を探すんだと、ワタルに言いたくなかった。

と、ここでリカが声を上げた。

「ユリ、これを見て！」

「何？」

リカが見つけたのは機体の側面部分だった。大きさは大体1m四方の大きさで、中央には何かで抉られたような傷が残っていた。

「こんなの……あの翼竜の引つ掻き傷じゃないの？」

「でもこれ……動物が引つ掻いたんじゃないくて、何か……こう……熱戦状のもので抉ったように見えませんか？」

リカの言う通りだった。あのセルヴアムが付けたものにしては、傷は深い。

かといって、ゴジラなどの熱戦でもない。ゴジラの熱戦ならもっと大きく抉れる……どころか、貫通して機体なんて一つの欠片も残らずに消えてしまうだろう。

だとしたらこれは一体何なのか……。

二人が黙っていると、突然燃えている機体がガタンと大きく揺れた。

顔を上げると、残骸の上に翼竜型セルヴアムが立っていて、二人を見ていた。

リカとユリは元々持っていたマシンガンを構える。セルヴアムは雄叫びを上げて、翼

を広げて向かってこようとした時：赤い尾がセルヴアムを掴んだ。

「ええ」

赤い鉄尾はセルヴアムの首をがっちり掴んで、地面に何度も叩きつけると、今度は先端が真つ赤な足が出てきて止めと言わんばかりにその足を頭頂部からグサリと突き刺して絶命させた。

殺したセルヴアムを掴んだまま、その殺した奴はリカとユリの前に姿を現した。

その姿を見た二人は、ゴジラを見た時と同等程度の身体の震えが襲って来た。

「何…あれ…」

「…何にせよ、逃げた方がいいわね…」

二人はマシンガンが無鉄砲に撃つよりも、逃げることを選んだ。

それが懸命だった。何故ならセルヴアムを仕留めた奴は、『一匹ではなかった』からだった。

マイナの案内でワタルはただ一人：彼らフツアの種族で言う祭壇に連れてこられた。

ワタルは冷静さを保っているが、まだあまり理解していない種族の溜まり場に単独で向かうというのはどうしても不安になってしまう。もしかしたら、祭壇というのは生贄を捧げる祭壇なのでは…など、無駄な想像だけが膨らんでしまう。

マイナが先に子供を近くに居る老人に預け、双子の片割れのミアナと共に昆虫の翅らしきものが描かれた祭壇に上がっていく。ワタルは中央に行き、そこで立たされる。

そして、双子の姉妹は壁画に手を置いて、目を閉じる。

壁画の奥は眩しく発光し、ワタルの脳内に直接語りかけてくる。直接口で話せばいいのにも思いつながら、ワタルは彼らが自分は何の用があるのか耳を傾ける。

『ワタリガラスよ……これを見よ……』

老人の声が聞こえ、ワタルは彼らが言う『これ』に目を向けた。

それは生物の死骸だった。祭壇の周りに備えられた炎で照らされたそれは、明らかに地球上にいない生物だった。見た目だけで言えば、赤いサソリと言ったら良いだろうか。

足の先端や尾の先端は真紅、他はダークレッドで、大きさは大体3mくらいに見えた。突き出るような口が出たままで、そこから緑色の粘性のある液体が漏れていた。足は十本以上あるように見える。緑に近い黄色の目を持ち、全体的に見て相手を一瞬で畏怖させそうな見た目を持ち合わせていた。

「これは……なんだ？」

『分からね……。しかし……ワタリガラスなら、知ってるのではあるまいか？』

「ど、どういふことだ？」

ワタルが思った通りのことを言い続けていると、木製の仮面を被ったフツアの民が怒号をワタルに浴びせた。

何を言っているか分からなかったが、明らかにワタルたち人類とビルサルドに怒りを向けている感じだった。

どうしてこうなっているか、分からなくて狼狽えているワタルにミアナが説明する。

『ワタリガラス、これ、運んできた…そう、思つて、いる…』

「俺たちが？ そんなわけない!!俺たちはこんな生物のことなんて知らない!」

ワタルがそう訴えても、フツアの民はまるで信じてくれなかった。

『これ、私たちの生活、影響……』

『だから、ワタリガラス…出て行って、もらう』

「待ってくれ!俺たちには本当に身の覚えがないことだ!」

いくら叫んでも無駄だった。周囲から「出て行け!」と、大量の声が頭の中に直接入って来た。

ここまで言われてしまつては、流石のワタルも反駁のしようがなかった。

反論できず、立ち尽くしていると、突然奥の方が慌ただしくなった。

何が起こりかけたのか、向かってみるとフツアの洞窟の広場に二人の女性が息を荒くして倒れていた。しかも、片方の足からは赤い血が流れていた。

「……リカ！」

足を負傷しているのはリカだったのだ。ワタルは急いで駆け寄って、大丈夫なのか確認しようと思つた時、狭い通路からも悲鳴が上がった。

そこに目を向けると、さつき祭壇に転がっていた赤い生物と同じ奴が入ってきて、フツアの民に襲いかかろうとしていた。その前に、ワタルはユリが持っていたマシンガンを取って、奴の頭に何発も銃弾を撃ち込んだ。

弾は何発か弾かれたが、すぐに硬い甲殻を貫いて、頭部から緑色の液体を噴き上げて、上体を倒した。

奴が倒れて数秒してから、ワタルは叫んだ。

「こいつを俺たちが連れて来たなんておかしい！こんな誰にでも襲いかかる怪物なんて……！」

これがワタルが出来る最後の訴えだった。

この必死の訴えも、長老の心には響かなかつた。恐らく、この洞窟の襲撃が一番の要因となつたのだろう。

長老の口から、こう言われた。

「出て行け……」

ワタルは、力なく……肩を落とすのだった。

奴らはさっきのワタルとの戦闘を見ていた。

奴らの大きさは様々だ。3mを超える個体もいれば、目に見えるのがやつとという大きさもいる。

そして、個体個体で情報を共有できるこの生物は、森の中で更なる進化に向けて、準備を開始する。

まず…そこら中にいる生物を捕食する。

エネルギーを蓄え、どんな生物にでも負けない身体と能力を備えようとしているのだ。

奴らの最終目標は…人類、ビルサルドが渴望している…ゴジラを殺すことだった。

第16話

フツアの族長から出て行かれるように言われたワタルたち人類とビルサルドはひとまず例の地下基地へと向かった。

実際、ここで住むだけなら何の支障もなかった。だが、異種族間で対立があると次に何かあるか分からない……そう考えていたからワタルはフツアと交友を良くしようと尽力したが、得体の知れない怪物の出現でその信頼は一瞬で崩れ去った。

それに問題はもう一つあった。

「マーティン博士！リカの足の手当てをお願いします」

そう……。その謎の生物によって怪我をしたリカだ。

傷は浅いが、未踏の地での傷は何があるか分からない。

ワタルたちはかつてない程の不安を抱えていたのだ。

「それは俺がやろう」

「ガルグ……」

「心配するな。俺たちの技術力を持ってすれば、こんな傷なんかイチコロだ」

「……分かった。任せる」

リカは足を引き摺りながら、ユリと共に奥の部屋へと向かった。

ワタルはマーティンと話をする。

「博士は、あの生物をどう見ます?」

実は基地の中にもあの生物の死骸は置いてある。

リカたちが仕留めた1匹らしい。それを解剖並びに研究しようと、ビルサルドとマーティン博士が回収してきたのだ。

「何とも言えない…。甲殻種の特徴はあるが、甲殻種ではない。かと言って、地球外の生命体でもない。私に気になるのは、これがどこから湧いて出てきたか…だ」

「…そうですね」

ワタルもマーティンの考えには同意見だった。

こいつは突然現れて、ワタルやビルサルド、フツアの民を襲い始めた。このゴジラ細胞に侵食された地球において、ゴジラ細胞を持たない生物が突如として現れるのもおかしい。

何か原因があるはずだ。

そう思ったワタルはマーティンに1つの提案を試してみる。

「博士、一回森に出て調査してみませんか?」

「調査?」

「はい。あの生物たちがどこから出てきたかを突き止めないと、フツアの人たちの信頼を取り戻せない」

「…それは一理あるな…。私もあの生物を調査してみたいし…。よし！やろう！しかし、誰と行く？」

「少数がいいでしょう。多いと被害が大きくなる。それと多脚砲台に乗って行くので、小さい翼竜やあの生物にあつても少しは耐えられると思います」

「早速行こう！」

博士は半ば興奮しながら、どんどん先へと進んでいく。

ワタルは能天気な博士を羨ましく思うと同時に、暢気過ぎないかとも思った。

多脚砲台に乗ったワタルとマーティン、そしてもう1人…。

「どうしてお前が乗ってくるんだ？ユリ…」

彼女はワタルたちが出発しように乗った時から既に中におり、決してワタルの言うことを聞こうとはしなかったため、止むを得ず一緒に行動を共にしている。

「リカを怪我させたのは私の責任でもあります。だからです」

「責任感の強いのは良いと思うぞ？」

何故かマーティンがフォローに入る。これ以上話していても埒があかないと思った

ワタルはこの話題を切り上げた。

3人は黙って外の景色を見ていたが、ここでマーティンがふとこんなことを言い出した。

「…私の気のせいかもしれないが、やけに翼竜が少ないと思わないか？」

「そう言われたら……」

「恐らく、あの生物が食っているんだ。このままじゃいつ俺たちがやられるか分からない」

そうやって森の中をひたすらに進んでいると、突然森が無くなった。

それもそのはずだった。

ここは最初にゴジラを倒した地点…要するに初めてワタルたちがゴジラ・アースを目標撃した場所だった。

「原子価エネルギー砲を撃って倒したと思ったら…奴が現れたのか」

「……あれは仕方がない」

マーティンはワタルにそう言う。

と、ユリがガラスに顔を付けて、クレーター状になった地面の中心をじつと見詰め出した。

「大佐、あの穴は何でしょうか？」

「どれだ？」

「あの…大きな穴の隣にも別の穴が…」

リカの言う通り、そこにはゴジラと原子価エネルギー砲が開けた穴とは別に掘り返したような穴が出来上がっていた。

「気になるな…。行ってみよう」

ワタルは多脚砲台から降りて、その穴へと向かってみる。

近づいてみると、その穴の大きさがよく分かった。

直径は2mもないが、仮に奴らがここから出入りしているなら充分通れる穴だ。

ワタルは唾を飲み込んで、単身で中に入っていく。

「気をつけるんだぞー！」

マーティンの声が穴の中に響き、木霊する。

ライトを片手に頑張つて降りるが、ここで足が滑つて身体が落下を開始した。

「やばっ…！」

どこまで落ちるのかと不安になったが、心配するほど深くはなかった。ただ、ワタルの尻は激しくぶつかつて痛みを起こした。

「ああ…‥‥いってえ…。何だこゝは…？」

グルリとライトで周りを照らしてみると、そこは…驚愕の場所だった。

「い、これは……☒博士！ユリ！来てくれ!!？」

興奮を抑えながらワタルは叫んだ。

誰かにこれを見せたい……。そんな気持ちが彼の心を支配した。

呼ばれた2人も急いで降りてみると、そこは…信じられない光景が広がっていた。

「これは……」

3人は今、部屋の中にいた。ゴジラの熱線か…オラテイオ号からの原子価エネルギーによるものか分からないが、右側は完全に吹き飛んでいた。その部屋には2万年も経っても変わらず、実験器具や書類が山のように置かれていた。

そして、一番に3人の注目を浴びせたのが、部屋の真ん中にある椅子に座って息絶えた死体だった。2万年の歳月で、体内の水分は完全に蒸発、エジプトにあるミイラそのものだった。

マーティン博士が恐る恐るそのミイラの首にかけられた名札を見て、読み上げた。

『芹沢…大助』…』

「芹沢大助？それって…」

「ああ…。ゴジラを殺せる兵器『オキシジェンデストロイヤー』を作ったと嘘を付いて通報された科学者だ」

ワタルはそのニュースを覚えている。

ゴジラが東京に来る数年前、オキシジエンデストロイヤーという究極の兵器を開発したと1人の研究者が発表したのだ。

だが、その次の日にはその兵器は眉唾物だったとされ、ゴジラに恐怖していた民衆の怒りを買って、その科学者は消えた…。

その科学者が…こんな地下で息絶えていたのだ。

「ここは乾燥しきっていたから、周りの器具も壁も崩れずに残っていたのか…。しかし、何故ここに…」

ワタルは書類の束の中に1つの日誌を見つけた。

それは芹沢博士の、遺書だった。

『私は罪人だ。生きている価値もない。

私は世間に究極の兵器を完成したと発表したけど、発表した後でそれは間違いだと思わされた。人類がゴジラを殺せば、また悲劇が生まれる。ゴジラは…人類を正しくするための神なのだ。決して絶対的な悪ではない。だから私はこの兵器…オキシジエンデストロイヤーを封印することにしたのだ。

だが、それこそ過ちだった。

ゴジラはアメリカからヨーロッパ、アジア…そして日本までを焼き尽くし、全てを破壊し尽くした。

私がこれを使つていけば、そんなことは起きなかつた。人類絶滅にまで発展することはなかつただろう。しかし今使つても、もう時既に遅し…。

私はせめてもの罪滅ぼしとして、この部屋にオキシジエンデストロイヤーを撒き、死ぬと決めた。

オキシジエンデストロイヤーは気体として部屋に充満し、私を蝕むだろう。

最後に私は問う。

何故…私たち人類はゴジラを憎むのか…」

この遺書を読み上げて、ワタルたちは考えさせられてしまう。

本当に…ゴジラを倒すことは地球のため、人類のためになるのかと…。

「…これがその…オキシジエンデストロイヤーを入れていた容器だな…」

マーティン博士が拾い上げた物は、大きな筒状のもので中央にはオキシジエンデストロイヤーを詰め込んでいたと見られる球状の容器があつた。

「…もしかしたら、これが原因かもしれない」

「どういうことですか？博士」

「このオキシジエンデストロイヤーが地中にいた生物に影響を与えた可能性はある。持ち帰つて分析する」

そう言つて、マーティンは容器を持って、この部屋から出る。

ワタルもこの部屋の惨状：そして、自殺した芹沢博士に冥福を祈りながら博士とユリの後を追うのだった。

その頃ベルドはガルグたちがいない間に一つの装置を設定する。

この装置が起動すれば、ビルサルドの長年の悲願は達成される。

そうすれば、メカゴジラなんか作らなくてもゴジラを倒せると同時に、面倒な地球環境も改善できると自分勝手に思っていた。

その事実を：ビルサルドも：人類も知らない。

「くくく…：。これさえ…：これさえ起動すれば、我々の勝ちだ…：」

元丹沢大関門から離れた場所でエネルギーを大量に消費して、身体を休めていたゴジラ・アースが進行を再び開始した。

今回はスペースゴジラなど、そういった地球外の敵に闘志を燃やしているわけではなく、ワタルたち人類：厳密に言えばビルサルドたちが復活させたメカゴジラに向かっているのだ。

奴は今回ばかりはいい加減に完全に消し損ねたナノメタルを破壊しようと思ってる。

だが、ワタルたちはそれに気付かず、謎の生物に現を抜かしてしまっている。
残された時間は、少ない。

第17話

オキシジエンデストロイヤーが入っていると思われる円筒を持ち帰って、マーティンの分析が終わるまでワタルは負傷したリカの元に立ち寄っていた。幸いにも彼女の足の怪我は浅くて、すぐに治るだろうとユリから言われたが……この地でそう言われても完璧には安心出来なかった。

「大丈夫ですよ、ワタル大佐。これくらい」

「そうだと良いんだが……。あの生物が付けたものだと考えると、どうしても……」

「大佐……いや、ワタル先輩はいつも心配性過ぎです。ゴジラと戦う時は……そんな弱気な態度を作らないくせに……」

「戦う時までこんななんだつたら、隊長やリーダーをやっつけていられるか」

「変わらないですね。昔、言ってくれましたよね。ゴジラは必ず倒せる。そしたら……美しい地球を見せてやるって」

「……その約束はもう破ったけどな。もうこの地球は……ゴジラによって汚されてしまった……。いや……結果的に俺たちが生んだゴジラによって汚された……と言った方がいいのかな……」

「ワタル先輩が悔やむようなことではありません。私たちは……まだ戦えます」

「リカ……」

ワタルはいつの間にか彼女に励まされていると気付いた。

そして、今まで考えたことも、思ったこともなかった感情が込み上げてくるのを感じた。

暫く二人は見つめ合い、互いの顔を近づけて行こうとした時。

『そうだ……大切な者を得るがいい……』

頭の中に、声が響いた。

ワタルは目を見開いて、辺りを見回す。

「……大佐？」

何度も何度も見回したが、人の気配はない。

いや……そもそもあの声は頭の中に直接入ってくるような感じだった。対話ではない。

「リカ、今何か聞こえなかったか？」

「いいえ。静かですけど……」

地球に帰還してから、たまに聞こえる謎の幻聴。

そして、何故か痛む右目。

これが何を意味するか、ワタルには未だに分からない。

その事を考えていると、突然部屋の扉が開き、マーティンが興奮したような…焦ったような表情をして入ってきた。

「大変だ、大佐！来てくれ!!？」

「あ、ああ…。リカ、大人しくしろよ」

リカは素直に頷く。

ワタルはマーティンの背中を追って、何があつたのか聞く。

「どうしたんですか？」

「あの円筒を持ち帰って分析したんだ。そしたら驚くべきことが分かつたんだ！」

マーティンは画面を開き、例の生物を映し出す。

「この生物はあの円筒の中に微量に残っていたオキシジェンデストロイヤーによつて変異した生物だつたんだ！」

「ということは…博士の見解は正しかったということか…」

「ただどそれだけじゃないんだ！このオキシジェンデストロイヤーを詳しく調べたら…これは水中の中の酸素を無効化する兵器だつたんだ！」

そう言われても、ワタルはおろかビルサルドも理解出来ずにいる。

「つまり？」

「分からないのか☒これは要するにゴジラを倒せる唯一の兵器だ!!？」

マーティンの発言は、とんでもないものであった。

ゴジラを倒せる…。ビルサルドも豪語していたが、こっちの方が明らかにコンパクトで扱いやすそうだった。

「これは水中で使うと、水分子の中の酸素だけを失くしてゴジラを殺すんだ。奴だって生物。体内の放射能エネルギーでは生きていけない」

「なるほど…。しかし、これは…」

「ああ。もう中身はほとんどない。しかも実験書も紙屑同然で再現は不可能だ。しかし、こいつを受け継いだ生物が奴らだったんだよ！」

「受け継いだ？ どういうことか説明しろ」

「あの生物たちはゴジラに攻撃出来る。非対称性透過シールドを破って、肉体を破壊する力を一個体が有している。そいつらがゴジラを一度に攻撃したら…」

「ゴジラ死ぬ」

それを聞いた他の隊員たちはメカゴジラが見つかった時と同じような反応で声を上げた。だが、ビルサルドは納得出来ずにいた。

「ちよつと待て。仮にそうだとして、奴らが殺したとして…今度は我々人型種族に襲いかかる可能性はないのか？」

「それは問題ないと思っっている。いくら奴らでもゴジラの巨体ではすぐにやられる。そ

うやっってお互いに体力を消耗すれば、こちらが後は排除出来る」

「なるほどな……」

「でも、何故今更になつて……」

「これは私の予想だが……我々が見つけたあの部屋は原子価エネルギー砲で半壊していた。それによつて空气中に分散していたオキシジエンデストロイヤーが漏れ出し、地中に生き残っていた古代の生物に影響して突然変異を起こした……と考えている」

「……それで理解した。良かったじゃないか、ワタル。これで……ワタル?」

ワタルの顔は青かった。

何故ならマーティンの話が本当だとすれば、あの生物を解放したのも結局は自分たちだということになる。

フツアの人たちが正しかったのだ。

その事実にかつくしと肩を落とし、ワタルは一人外へと出て行つた。

その後ろ姿は、誰が見ても完全に落ち込んでいた。

基地はもう隠す気もないくらいに上へ上へと高く昇つていた。

最初は地下基地であつたのに、今では鉄筋ビル並みの高さになつている。セルヴァムたちも突然の建造物に驚くことなく、翼を休めるがすぐにナノメタルの餌食となつてこ

の世を去る。

そんな場所の屋上にワタルは呆然と座っていた。

いつも考えていた。今更ながら…。

何故、人類は、ゴジラを殺そうとしているのか…と。

自身も両親や友を殺された恨みからゴジラを倒そうと躍起になっていた。しかしよく考えてみれば、ゴジラは本当に敵なのかと疑った。敵だと認識しているのは…自分たち人類だけではないかと思っただ。

実際、ゴジラが破壊の限りを尽くした国々は1ヶ月も経つと緑豊かな土地へと変貌し、新たな生態系が生まれた。元は人類が勝手に住み着き、森を切り開き、都市を立てて自分たちのものだと言語していたが…そんなのは脆いものだった。

ゴジラはもしかしたら、地球を元に戻そうとする創造神なのかもしれないとワタルは思い始めていた。

だが、そんな考えはすぐに排除したいのが本音だった。

そうでなければ、何故…これほどの犠牲を払ってまでゴジラに立ち向かってきたのか…分からなくなってしまうからだ。

「俺は…何故、ゴジラを殺そうとしているんだろう…」

思ったことが口に出てしまう。

ワタルが樹海ばかりが続くこの地を暫く眺めていると、後ろから足音がした。ゆつくりと振り向くと、そこにはフツアの双子の妹、ミアナが立っていた。

「ミアナ……どうしてここに？」

「ワタル、今……ハルオと、同じ……」

ワタルの質問に答えずにこんな事を言い出した。

マーティンやガルグが言っていた前のリーダーも、ワタルと同じように悩んでいたとミアナは伝えたのだ。

「……なあ、俺は……正しい、のか？」

「ワタル、勝とうとする、ダメ。負けるのが、勝ち……。それに、フツアの目的……命を、繋ぐ」

「命を……繋ぐ……」

不思議とワタルはミアナの言葉を受け入れている。

彼女が伸ばしてくれている手を取ろうとした時、青い光が二人の視界に入った。

1つの熱戦がメカゴジラの基地のすぐ横を一閃したのだ。

そして、樹海の一部は綺麗に焼かれ、吹き飛んだ。

基地から少し離れた場所に、あの破壊の王が咆哮していた。

「ゴジラ……！」

「ワタル…私、戻る。だから、ワタルも…」

その言葉はここから逃げようと言っているように聞こえたワタルは…。

「中にはまだ仲間がいる。逃げるわけにはいかないんだ！」

そう叫んで、ワタルは再び基地の中へと戻っていった。

ミアナは不安そうな視線をワタルの向け、ゆっくりと歩み寄るゴジラにこう呟くのだった。

「破壊の王…あなたは、それほどにまで…私たちが憎いの？」

…と。

第18話

「ガルグ！メカゴジラを起動するんだ!!？」

急いで基地の中へと戻ったワタルはすぐにガルグにメカゴジラの出動を要請した。しかし、ガルグから帰ってきた言葉は…。

「ダメだ。まだ完全に整備しきれていない。もう少し待つてくれ！」

「クソ！すぐそこにまで迫っているのに…！」

モニター越しでもゴジラは再び熱線を発射しようと背びれに電気エネルギーを蓄えている。そして、正に発射されようとした時、ゴジラは突然バランスを崩して熱線を基地から離れた場所へと誤射した。

それでも樹海にはもう一本の焼けた線が浮かんで、破壊力を誇示する。

ゴジラがゆっくりと青い瞳を向けると、右足に赤いあの生物が鋭い足で突いていたのだ。

何故この巨大な化け物に攻撃を仕掛けたのかは分からないが、今のでゴジラの逆鱗に触れてしまったのか、ゴジラは咆哮を上げてその生物を難なく踏み潰した。

邪魔者が消えた…。これで心置きなく人類を抹殺出来る…そんなことを思いながら

前を向くと…そこには体高300mを超えるゴジラの半分くらいの大サイズのあの生物が何十体と現れていたのだ。

これにはゴジラだけでなく、ワタルたち人型種族も驚いた。

「あいつら…あんなに大きくなれたのか…」

「やはり…オキシジェンデストロイヤーの効力は凄まじい…」

マーティンは感心しているように言った。

彼らは隊列を作り、ゴジラに向かつて口を向けて、薄桃色の光線を一齐に吐き出した。ゴジラには非対称性透過シールドがあるため、誰も効かないと思っていた。しかし、あの光線が1つにまとまり、一直線の太い光線となるとゴジラは後ろに後退していき、最終的に光線で押し倒すにまで至ったのだ。更に熱線は枝分かれして、樹海が全て無くなるのではと言う程の威力で薙ぎ払っていった。

「すげえ…」

「…破壊王だ」

マーティンは思わず口から漏れてしまった。

あの熱線の威力…あれは正しくゴジラの熱線とほぼ同格のものに見えたのだ。

「奴は…全てを破壊する王…デストロイアだ…」

「デストロイア…」

マーティンの言葉は本当に正しかった。

ゴジラが倒れてからも、デストロイアは光線の放出を止めるところかずつと同じ威力で吐き続けている。

どこにそんな膨大なエネルギーがあるのかと思える程だった。

だが、ここでゴジラの反撃が始まる。

辺りが薄桃色に染まっている中で、青き光線が放たれて、デストロイアの頭を貫いた。ブシヤアと緑色の体液が溢れ、デストロイアは身体を苦痛にくねらせる。

ゴジラも立ち上がり、更なる熱線を与える。

今度は腹を貫き、デストロイアの身体は周囲に飛散する。

あつという間に形勢を逆転したゴジラは勝利の雄叫びを上げる。

そして再び人類に攻撃を仕掛けようと思った、が……ここで薄桃色の気体が1つの場所に集まり始める。それは先程身体がバラバラになったところで、その気体は竜巻となる。

ゴジラが静かに見守っていると、そこからは……『破壊王』と呼ぶに相応しい姿の怪獣が現れた。

体高はゴジラよりも赤く、身体は赤黒い。

尻尾は鋏尾になっており、頭部からは長くはないが白い角が生えている。更には自分

を大きく見せたいのか、巨大な翼を持っている。

それを閉じることなく、ゴジラに向けて広げている。

「あれが…デストロイアの最終形態…」

「凄まじい姿だ…」

今度はガルグからも感嘆たる声が漏れてしまう。

怪獣に向けて、凄いや素晴らしいなどと思ったことはないワタルだったが、今回ばかりは…その荘厳な姿に言葉を失った。

だがゴジラには関係ない。

小さかったのが大きくなっただけで、熱線を当てるのが簡単になった。

放たれた熱線はもう一度腹部を貫く。デストロイアの腹から緑色の体液が溢れる。

しかし、デストロイアの身体は間もなく再生をしていき、何とも無かったのようになる。

それからデストロイアは口から薄桃色の光線を吐き出した。

隊列を作って出した光線よりも強く、太く、威力が増した光線を見たゴジラは同じく青い熱線を放って対抗しようとする。

青と薄桃の光線は激しく衝突して、周囲の木々、そして地面をも抉る。ほんの数秒の衝突はすぐにデストロイアの勝ちで終わる。

ゴジラの熱線は徐々に押されてゆき、最後には口元で炸裂して顔面から光線を受けたゴジラは後方へと飛ばされる。

苦しそうな呻き声を上げたゴジラを追撃する形でデストロイアは翼を広げて近付くと、缺の尾でゴジラの首元を捉えて、電撃を流し、有り余る力で小高い山にその巨体を叩きつけた。

その衝撃で大地は揺れ、メカゴジラ基地にもその震動が届いた。

圧倒されているゴジラを見たワタルたち人類の目はもつとやれ……ゴジラをそのまま殺してしまえと言いたげな表情を知らず知らずのうちに出してしまっていた。

その要求に答えるようにデストロイアは光線を連続して吐き続ける。

辺りが粉塵で見えなくなるまで、連続して光線を放ち終えた時には小高い山は崩れ落ち、その傍らでゴジラは弱ったように倒れていた。

それを見たガルグは、ここで……誰しも予想し得ない言葉を発した。

「メカゴジラ出動！ 目標は……デストロイアの抹殺!!？」

それを聞いた者たちはもちろん驚いた。

今までゴジラを倒すことを目標にしていたガルグが、唐突にゴジラの味方をするのだから当然だろう。

ワタルは何故かは半分程分かっていたが、一応聞いてみた。

「ガルグ…どうしたんだ？」

「今回ばかりはゴジラに手を回さないとやられる。ゴジラは…今瀕死の状態だ。デストロイアはゴジラを唯一殺せる生物だとマーティンは言ったが、裏を返せばこれはゴジラを唯一『超える力を持つ』怪獣ということだ」

「…だからゴジラを助けるか…。ふん、スペースゴジラと同じで…まるでデジャブだな…」

「ワタルは反対か？」

「いいや。むしろ賛成だ。思いつきりやってくれ」

周囲は響めきと焦りが混じった声が聞こえているが、反対する者は誰もいなかった。

いや…次元の超えた話についていけないというのが正しいだろう。

「ワタルがそう言うなら…遠慮無くやるぞ!!？」

ガルグは1つの赤いボタンを押す。

すると、地面からドームがせり出てくる。

それが半分に割れ、中からスペースゴジラ戦より更に強化されたメカゴジラが姿を現した。

メカゴジラの赤い目がデストロイアを捉え、デストロイアも新たに現れた敵を認識する。デストロイアの咆哮が上がったと同時にメカゴジラは膝にある砲台からの砲撃を

開始する。

砲撃はデストロイアに直撃するが、全く効きはしない。

それはメカゴジラも理解していたのか、今度は身体を低くさせて背中から刃を何個も射出させる。

鋭く砥がれた刃は高速で発射されて、デストロイアの身体に突き刺さる。それも大して効いてないように見えたが、ここでメカゴジラが足腰のエンジンをフルにしてデストロイアに近付くと腕からブレードを出して、傷付いた胸に振動させながら突き刺した。

デストロイアは苦痛の悲鳴を上げたが、長い尻尾でメカゴジラの腕を掴むと、力任せに地面に叩き伏せた。ブレードは腕から外れてしまい、突き刺さったままだが、デストロイアはそこから光線を放とうとする。

だが、その攻撃をメカゴジラは足腰のエンジンをフル稼働させることで避けた。態勢を立て直し、再びデストロイアと会い見えるメカゴジラ。

その動向を見守るワタルたちを他所にベルドは、早く『あれ』が起動可能にならないのかと待っていた。

ガルグやベルベにもこの事を伝えて、こんな馬鹿げた戦いを止めさせたいと思ってるのだが、ワタルやマーティンが近くにいるためそれも出来ずもどかしかった。

「くそ……。『あれ』さえ……。『あれ』さえ起動出来れば我々の勝ちだというのに……」

隠れながらベルドがこんなことを呟いていたことを知っている者はいない。
そして…ベルドが言う『あれ』の起動可能時間まで、時間は少ない。

第19話

デストロイアはメカゴジラをきちんと目視していると、突然身体からガスを放出して視界を悪くさせた。メカゴジラがゆっくり歩いてみると、不意にメカゴジラはバランスを崩した。

原因は足に鋭く尖った足を突き刺していた小さなデストロイアがいたからだだった。しかも一匹ではない。何匹という小型のデストロイアがメカゴジラを包围し、攻撃を始めたのだ。

流石のメカゴジラも複数体を相手にするのは酷で、背中や足：胸といった部分が小型デストロイア軍によって破壊されていく。もちろんナノメタルだから完全に破壊され尽くされることはないのだが、再生が追いつかない可能性が出てくる。

なので、メカゴジラは身体中に小さな高射砲を作り上げ、周りにいる小型デストロイアを一閃した。

やったのは良いもののメカゴジラの身体は大破し、完全に再生しきるまでには時間がかかりそうだった。その間にもデストロイアは先程の形態に戻りつつあった。

このままではメカゴジラがやられると思われた時、突然メカゴジラの目が青く光り、

動きを止めた。

「☒何だ☒」

ガルグが何をしててもメカゴジラは動かない。

それどころかメカゴジラのナノメタルが周囲に増殖を開始する。

それを見たマーティンは1年前の恐怖が頭に過った。

「ガルグ中佐！こいつは…また…!!？」

「違う！マーティン、今回は俺たちじゃない!!？」

「じゃあ誰が…！」

ここぞでワタルは思い当たる人物を呟いた。

「ベルド…」

それからすぐにワタルはベルドがいる部屋に向かったすでもぬけの殻だった。ではどこに行ったのか…。

「マーティン！揚陸艇でここにいる隊員をフツアの洞窟に避難するんだ!!？」

「しかし…我々は追い出されて…」

「そんなこと言ってる場合か!!？あの金属に飲まれたいか!!？」

「でも、ワタル大佐はどうするんですか☒」

「…ベルドを探す。1発殴らねえと気が済まない」

リカが呼び止めようとしたが、ワタルはすぐに基地の奥へと走っていった。それを追おうとしたリカだったが、侵食を開始したナノメタルがこちらにゆっくりと向かってきたのだ。

「逃げる！ 飲まれたら終わりだ！」

全員マーティンの後ろについて行く形で逃げて行く。

「大佐……御無事で……！」

リカも痛む足を堪えながら必死に走って行くのだった。

メカゴジラが停止したことでデストロイアはチャンスだと思い、薄桃色の光線を発射する。動きを止め、ナノメタルを増殖させる苗床となったメカゴジラは回避も防御も出せずに粉々に吹き飛んだ。

デストロイアは大きな雄叫びを上げて、勝利を確信したかのようなだったが、足元にまで迫っていたナノメタルに気付かず、それに蝕まれて行く。暴れて何度となく引き剥がして行くが、それでも完全に引き剥がせない。

堪らなくなったデストロイアは大きな翼を広げて空中へと逃げ出す。

と、その時青い斬撃がデストロイアの翼を斬り落として、デストロイアを自然に落下させた。

それを行ったのはもちろんゴジラだった。

しかし：様子が違う。

身体の至るところに赤い光が漏れ、周囲の森は自然と燃えて溶けていく。デストロイアとゴジラはかなり離れているのにも関わらず、その熱は届いていた。

ゴジラの閉じていた目が開かれる。

金色に近い黄色に変わった眼色にデストロイアは凄まじい恐怖を感じたのか、一歩：足を後退させた。しかし翼を失ったデストロイアは動きを早く出来ない。

ゴジラからすれば格好の的ではない。

ゴジラはデストロイアに背中を向け、巨大な尾を天に高々と上げた。

尾に電撃を溜めていき、勢いよく縦に振り下げた。

そして薄紫色の斬撃が形成され、デストロイアの身体を真つ二つに斬り裂いた。

デストロイアは口から緑色の体液を溢して、視界の焦点を失っていく。

だがゴジラの猛攻は止まらない。

更にその尾を横に振り、デストロイアの上半身と下半身を分裂させた。

十字に斬られたデストロイアは4つの肉片となって、地面に転がり落ちていく。

そして最後の止めにゴジラは口先からではなく、口元から薄紫色の熱線を放出した。

これによりデストロイアはおろか、その周囲は激しく爆発と炎上を繰り返して、地獄絵

図としたのだった。

基地の屋上へと駆け上がったワタルの前にはメカゴジラも破壊され、デストロイアをも倒したゴジラをジツと見ていたベルドの姿があった。

「ベルド!!? 貴様…初めからこれが目的だったのか!」

「…そうだ。我々ビルサルドの目的はこの地球を第二のビルサルディアにすることだった。そして…それももうじき叶う」

ベルドの言う通りで、森は銀色のナノメタルに染め上げられていく。

このままでは地球がナノメタルに飲み込まれてしまうのも時間の問題だった。

「ゴジラを倒すつてという言葉も…嘘だったのか?」

「…それは本当だ。ゴジラを倒さねば、我々の計画は遂行できなかつた。だからナノメタルで作られたゴジラで倒そうとしたが…結局この有り様か…」

ワタルは気付いた。

ベルドの言葉に力がないことに…。

その原因は今もお熱線を森に放ち続けるゴジラだった。

ナノメタルの侵食が進み切る前にゴジラはこの基地を破壊しようと向かって来ていた。

「ここまでだ、ベルド。もう終わったんだ。一緒に……」

「いや……最後まで見送る。ビルサルドの絶滅を……」

ベルドの意志は固い。

もしかしたらワタルがゴジラを倒すという信念よりも固いかもしれない。しかもワタルにはそんなベルドを説得する手立てがない。

彼をこの場から動かすのは不可能だった。

かといって、自分もここから逃げ出すことも出来ない。すぐ後ろにはナノメタルの侵食、そして燃え上がる森林。

誰かが迎えにでも来てくれれば……。

そう思っていると、ヒュウ……と風が変わる音がした。

それはヴァルチャーだった。そして……乗っていたのは……。

『大佐！捕まってください！』

「リカ☒」

『早くしてください！時間がありません!!?』

ゴジラも迫りつつある今、いつまでもここにいる訳にはいかない。

ワタルはヴァルチャーの腕に乗り、最後にベルドに向かって叫んだ。

「大將！今までありがとうございました!!?」

敬礼して、感謝を述べた。

そして燃え上がる基地からヴァルチャーは即時退去した。

ベルドはゆつくりと歩いてくるゴジラを見続けた。

ビルサルドの悲願はナノメタルで新たな母星を作ることだったが…今考えれば我々は本当はゴジラを倒したかっただけなのかもしれないと…。

望みは叶えられず残念だが、悔いはなかった。

と、そこにガルグがやって来た。

「…ガルグ」

「大将…我々は結局…何しにこの星に来たんでしょうか？」

「…それは永久に分からない」

「ビルサルドらしくない。全てを論理で片付けて来たのに…」

「良いじゃないか…どうせ…もうその思考も消え…」

2人の視界が青くなる。

鼓膜が砕けそうな轟音が辺りを轟かせる。

メカゴジラ基地はゴジラの熱線を直撃し、全てが破壊し尽くされた。

ゴジラの高々な咆哮が、炎上する樹海中に響いた。

こうして…メカゴジラは三度…ゴジラに負け、どんな生物だろうと…機械だろうとゴジラには決して敵わないということが判明するのだった。

最終章 黄金の輝き、再来

第20話

ナノメタルが完全に：前回のように残ることなく、ゴジラによつて消滅した。今回はゴジラも念入りにやつていたのか、基地が溶けて跡形が無くなつても尚、何度も何度も熱線を打ち込んでいた。

そこに残つていたガルグやベルド：ビルサルドの隊員たちは死に絶えただろう。

ゴジラを唯一倒せると思われていたデストロイアも：オキシジエンデストロイヤーの影響で何度も再生を繰り返したが、それも限度があつたのか、最後は十字のプラズマカッターを正面から受けて焼き切られ、熱線を打ち込まれて、ナノメタル同様に細胞の一欠片も残らないレベルにまで焼き尽くされた。

G細胞の樹海も：ゴジラの熱線やプラズマカッターを受けて燃え上がり、その火は2日程続いたのだつた。

その光景をよく見ていたワタルたち人類は、もうゴジラには勝てないと確信した瞬間だった。人類がいくらか知恵を絞り、その力を集めたところで神にも匹敵する奴を殺そうという考え事態が愚かだと分かつたのだ。

ワタルも今回の戦いでゴジラ殲滅作戦は終わりにしようと考えていた。

自分が何故……ここまでゴジラに固執していたのかも、今となっては分からなかった。

ただ……負けを認めたくなかったただけなのかもしれないと、ワタルは思いつつ保存食が入った壺を抱え上げた。

ナノメタル基地を失い、母船もない今はフツアの洞窟で居候の身で住ませてもらっていた。一部の隊員は原始時代の生活に耐えられずに何処かへと出て行ったが、今はどうしてるのか……。

その後、デストロイアを殺したのでフツアと人類の溝は無くなり、再び友好関係を築けた。これも説得を行ってくれたミアナのお陰だった。

片言の日本語だが、彼女はこう言っていたのをワタルは覚えている。

「みんなで……命、繋ぐため……。だから……仲良し……」

ミアナの言葉に何度救われたことかとワタルは思った。

迷った時もミアナが助言してくれなかったら、今頃あの基地で心中しているかもしれない。

何はともあれ、ワタルはここで静かに……幸せに暮らしていこうと思っていた。

その晩、ワタルは再び夢を見た。

暗闇に光る七芒星……。それらが何度も組み合わせたり、離れていたり……。どうしてこんなものを見ているのかと思っていると、ワタルの前に背の高い……髪を結っている男が現れる。

そして彼は手を挙げて、こう言い出す。

「君は本当に諦めるのかね？ゴジラを倒すことを……」

「何を今更……。俺はもう勝てないと判断したんだ。負けると分かっている戦いに何故身を投じる？」

「そんな軽い気持ちでこの星に戻ってきたというのか？」

彼がそう言うのと、奥の七芒星から3つの頭を持つ龍が現れた。

そいつは男に巻きつき、俺に目を向ける。

「これが我らの神……ギドラだ。これを使うが良い……。そうすればゴジラも……この星の動植物も全て蹂躪出来るだろう」

「……何なんだ……お前は」

今更ながら思ったことを呟いた。

すると男は笑いながら言った。

「君の瞳に何度も呟いただろう？これで良いのかと……」

瞳にという言葉でワタルは思い出した。

時折右目が痛くなり、右目にだけ何か写っているように見えたことがあったことを……。

「何が目的だ」

「ゴジラを殺したい者に、力を与えたいだけだ」

「そんなものに騙されるか！もう俺は……ゴジラとは関わらないことにしたんだ!!？」

「……それでいい……。それでいいのだ……。いずれ君は……『こちら』側に身を置くことになるだろうから……」

途端、巻きついてきた龍がワタルに向かって来た。

そいつらがワタルの顔に食らいついたと同時にワタルは目を覚ました。

「はっ……はっ……！」

服は汗まみれで息も荒い。

自分でもどこかおかしいことくらいすぐに分かった。

「何なんだ……今の……！」

暫く息を整えようと深呼吸していると、右目が焼けるような刺激が走った。

「くっ……」

ワタルがふと自らの防護服に目をやると、そのプレートに写った自身の右目に……言葉を失った。

右目はさつききの夢の中に出てきた男と同様に黄金に光り、七芒星がゆつくりと回転を続けていた。

それを見たワタルは途端に恐怖に駆られた。

すぐに布を引き千切り、右目を封印する。

だが…これで右目が元に戻るなんて思えなかつた。

「何が……一体どうなっているんだ？俺は……」

その日、ワタルは安眠に就くことは出来なかつた。

黄金の翼は…すぐそこにまで戻って来ている…。

美しくも恐ろしい黄金の三つ首龍は…優雅に地球へと飛んでいく…。

第21話

最近、ワタルの様子がおかしいことは誰しも気が付いていた。

以前のようにリーダーとしての言葉も消え、自分の部屋にずっと籠りっぱなし。食事
もろくに摂らない。

果てには夜中に叫び声を上げて、地面の上でのたうち回る。

こんな異常な行動の数々をしているせいで、ワタルはゴジラを殺せなかったことが相
当堪えていて、悔しすぎて頭がおかしくなったのではとも言われ始めた。

しかしミアナとリカはそういうことではないように思えた。

つい1週間前はいつもと同じ様子だったのが、この2、3日でここまで酷くなるもの
かと思った。

だがそう思っても…彼を助ける方法は見つからず…途方に暮れる日々が続いた。

次の日も、リカはミアナから渡された食事を持ってワタルの部屋に入る。今日は上半
身を起こして、ただ俯いているだけ。

最近の様子からすればまだマシな方であった。

「大佐、ご飯です。食べないと……いざって時に身体が動かさせませんよ?」

そう告げて部屋を出ようとした時、ワタルの左手辺りにキラリと光るものが見えた。それはナイフで、リカが部屋から出ると同時に右目に向かって突き刺そうとしていた。

それに気付いたリカはすぐ様ワタルに飛び付き、ナイフを奪おうとする。

「大佐!!? やめて……やめてください!!?」

「離せ!!? もう……もう嫌なんだ!!?!!? こんなの見たくない! 俺の右目は……イカれてしまっているんだ!!? リカにも見えるだろ 黄金の輝きが!!?」

そう言われたが、リカには普通の状態の右目が見えているだけだった。

「……何も……見えませんけど……」

「そうやって全員俺を騙そうとする!!? 夢の中の男も! リカも!!? フツアだってそうだ! 全員……俺に全てを押し付けて……!」

「落ち着いてください!!?」

何度説得してもワタルが落ち着くことはない。

最後は他の隊員がワタルの部屋に雪崩れ込んで、暴れる身体を抑えつけて、疲れ切つて寝るのを待つのだった。

「……はあ……」

リカはため息を吐く。今日あったことは、初めて300mのゴジラ・アースを見た時よりも衝撃的だった気もする。

いつから…大佐はああなってしまったのだろうかと…リカは改めて思った。

『リカにも見えるだろ☒この黄金の輝きが!!?』

黄金の輝き…：一体何のことかも分からない。

だけど今はそんなことはどうでもいいことだった。

早くワタルを元通りに戻さなければ、フツアとの関係にも何かしらの影響が出るかもしれない。

しかし、ワタルを元通りにする方法なんて何も無いし、出来ることもない。

そう考えると…ワタルがゴジラに対していかに己が無力な存在であることを叩きつけられた気持ちが分かる気がした。正に今の状態だ。

どんな策をやろうとしても、全て無に帰ってしまう。

そう思うと…リカの目に自然と涙が溜まった。

「無力だ…：私は…」

「そんなこと…ない」

リカの呟きに答えたのはミアナだった。

「ミアナ…」

ミアナはリカの隣に座って、ゆっくりと片言の日本語で話す。

「ハルオ……も、同じ、感じてた……」

「ハルオ……アトララム号の船員で、ゴジラ討滅隊の？」

マーティンに聞かされた限り、ゴジラを倒すために全力で挑んだが、やはり倒せず、最後はゴジラに特攻して死んだ……と聞かされた。

「ハルオは……迷って……溺れそうになった。奴に負けそうに……なった。だけど、勝った。それはハルオ……意志が、強い……から」

「『奴』？ 奴って？」

「ギドラ……黄金の輝きを放つ魔物……」

それを聞いた途端、リカは驚きのあまり立ち上がってしまった。

「黄金の輝き☒……まさか……！」

漸くワタルを苦しめていた者の正体分かり、急いでワタルの部屋に飛び込んだが既にその姿は無かった。

ーリカが来る5分前ー

右目を抑えて……ワタルは薬物依存者のように眩き続ける。

「助けてくれ……助けてくれ……助けてくれ……助けてくれ……」

『助けてほしいか?』

また…あの男の声が聞こえる。

だが、身も心も弱り切ってしまったワタルには、男を突き放す力は残っていなかった。

「お願いだ…。こんな嫌だ…。解放してくれ…」

『本当に良いのか?ゴジラを倒すことを諦めた君が…』

「今更そんなこと言うのか?俺をここまでポロポロにさせといて…」

これがこの男の狙いだってことくらい…分からない訳ではない。

だが…永遠に見え続ける七芒星と何者かの連続した咆哮…。

この2つが消えるのなら…ゴジラを倒そうと人間を滅ぼそうと地球が滅びようとどうでもよかった。

何故なら…今にワタルは…全て、この苦しみから解放されたいの一心で動いてからだ。

「頼む…。もう…。神でも幽霊でも何でもいい…。俺を…俺を…助けてくれ…」

『…承知したよ…。それなら…その右目を貫くよ…。君の祈願は、必ず…私たちの神が果たしてくれよう!』

男が何か…結晶のようなものを高く掲げると、黄金の輝きが増していき、ワタルの意識はプツリ途絶えた。

身体は一瞬、死んだように動かなくなったが、すぐに立ち上がった。その右目では：七芒星が輝き、その光は全てのを照らしていくのだった。

地球の近くに再び特異点が発生する。

今度は前よりも大きい。前回と違うことは、宇宙で舞っていたオラテイオ号の破片が特異点に入る前に、人間の目に見えない程に粒子にされていった。

そして：再び見えた青い星に向かって、多量の赤き目を煌々とさせるギドラ……。だが、今回は頭と首だけではない。

全てが爛々と輝く身体が特異点から全て曝け出し、黄金の輝きを地球に見せつける。今では青い地球も：金色に支配されていた。

ギドラはゆつくりと：黄金の翼を飛ばたいて、地球へと向かっていくのだった。

第22話

空がおかしい。

マイナは見てすぐに分かった。ゴジラが眠っている近くの雲が黒くうねり、雷雨が降り始める。黄色い稲光は何度も起き、それらが樹海へと落ちて山火事を起こしていく。

そして：その渦巻く黒雲から姿を現したのは：1年前にも地球を滅さんとやって来たギドラだった。

しかし、その容姿は前とは大分違う。以前は三つの首をワープホールから見せていただけのギドラは今回：黄金の翼と2つの足、更に2つの尾も揃えている。

なので、ギドラは今回：別の宇宙を介してやって来たのだが、地球環境に適應してやって来た：ということになる。

外の様子がおかしいと思ったマーティンやユリたちも外に出ると、夜の暗闇を一瞬にして、黄金一色に染め上げる怪物が目に入った。

「ギドラ何故だどうして奴が…」

「博士、あの怪物をぞ存知で？」

ユリが聴くと、マーティンは難しい表情をして答える。

「全ての星を喰らう…虚空の王だ。かつて私たち人形種族の1つ、エクシフの神だと崇める存在だ」

「神……それなら、ゴジラを…」

「馬鹿なこと言うな!!？」

いつものマーティンからは考えられないような口ぶりが飛び出して来たため、ユリはビクツと身体を震わせた。

「あれは…アイツは、ゴジラを倒せる倒せないの次元の問題じゃない。地球が喰われるか喰われないかの問題に発展するほどの力を有しているんだ」

「地球が…喰われる?」

そのキーワードだけでも、マーティンが一年前、ギドラがどれだけ力を有しているかが予想出来た。

それを考えると…恐ろしい怪物が登場してしまったと思っていると、リカもこちらに走って来てこんなことを…。

「大佐は……ワタル大佐がいない!!？」

「…まさか!」

マーティンは何かを察したかのように言葉を漏らした。

それが何なのかは、フツアの民以外は誰も分からなかった。

「……くくく……。さあ、救済だ……」

ワタルの身体を手に入れた男は余裕綽綽と呟いた。

何故なら……今回のギドラこそ……究極の姿だからだった。

空が煩いと感じたのか、ゴジラはデストロイア戦からずつと眠っていた身体を数週間ぶりに起こした。目を開けて、天空を見ると雷豪雨が起きている。

しかも……その黒雲の下には……一度倒したはずのギドラが鎮座している。敵を確認した瞬間、ゴジラの体内の膨大な電撃が背びれに蓄積されていく。青い電撃はギドラの黄金の輝きに負けない程に発光する。

そして……身体をグルリと反転させて、再び遭い見えた敵に咆哮した。

ギドラも1年前にコテンパンにしてくれたゴジラを見て、大量にある赤い目を更に光らせて敵意を上げる。

互いが少しの間、出方を待っていくかと思いきや、間髪入れずに、ゴジラは背びれに電撃を溜めていき、口元から青い熱線を放出した。

ギドラに真っ直ぐ向かっていった熱線は間違いなくギドラの頭を1つ、吹き飛ばしたかのように思われた。だが熱線は重力を操れるギドラによってねじ曲げられて、遙か空

の彼方へと飛んでいった。

一度戦ったことでゴジラも学習している。

二度も同じ攻撃はせず、足を動かして肉弾戦に持ち込もうとする。

だがギドラはゴジラが近づく前に、黄金色の光線を放つ。

真正面から受けたゴジラはこの光線に耐えようとするが、他の二体からも光線が発射され、威力が3倍になった瞬間、耐えられずに吹き飛ばされる。

ギドラもゴジラに隙を与えないように、大きな黄金の翼を広げて、そこに光線を流してエネルギーを蓄える。

ゴジラが立ち上がり、ギドラを直視した途端、大きな翼から数多の電撃が溢れ出し、それらはゴジラを巻き込んで至るところに降り注ぐ。

森を塵と化し、セルヴァムは骨も残らない程に焼かれ、ゴジラも透過性シールドを展開するも一瞬で破壊されて、連続して電撃を受け続けた。

ゴジラは踏ん張って立っているが、もう限界だろう。

それを分かかってかギドラは素早い動きでゴジラに近付き、両肩と首に牙を食い込ませ、地面に叩きつけた。

10万トンもの巨体が地面にぶつかるとだけで、地形は隆起し、大地震のような震動が広がる。

ゴジラも抵抗しようと、熱線を撃とうとしたが、噛まれている部位からエネルギーを奪われ、即座に熱線を撃てずにいる。

ギドラの目は更に爛々と輝きを増していき、ゴジラを啞え上げ、近くの山に放り投げたのだった。

子高い丘の上に行って来た人物を見て、男は驚いた。

「ほお……まさか君が来るとはね……」

「……あなた……ワタル先輩をどうする気？」

リカは隊員に渡されている銃を構えて、ワタルに聞く。いや……ワタルの身体を借りた『誰か』に……だ。

男はそのままギドラに視線を移し、リカに話し始めた。

「自己紹介が必要だね。私はメトフィエス。地球に逃れて来たエクシフの一人だ」

「エクシフ……あのよく分からない宗教のことね」

「よく分からないは酷いね。これでもアラトラム号では、結構人気だったんだよ？」

アラトラムの名を聞き、リカは少し混乱する。

「アラトラムって……あなた……幽霊？」

「幽霊ではない。私たちエクシフはずっと誰かの心の中で生き続けている。それが……」

「ワタル先輩……」

「その通りだ。そして……彼のゴジラへの激しい憎しみを増大させて、ギドラ……我らが神をここに降臨させた。一度呼んだことがあるから、意外に容易かったよ」

「ワタル先輩を解放しなさい！ さもないと……!!？」

リカは拳銃を強く握る。だが、メトファイエスは余裕綽綽だ。

「いいのかな？ この身体はワタル大佐のものだ。今ここで撃てば、ワタル大佐は死ぬ」
「えっ……」

「私がここにいる理由はワタルが心からゴジラを倒したいと思っているからだ。それが無くならない限り、私は永遠に存在する」

「そんな……」

「さあ……君も……ギドラに飲まれるといい……」

ワタルの身体を借りたメトファイエスが身体をグルリとリカに向けると、その目には七芒星が輝いていた。

見てはいけない！ そう直感したりリカだったが、時は遅く、ちよつと見た瞬間に力が抜け、意識が持っていかれそうになる。

「……どこまで耐えられるか……見ものだ」

マイナとミアナは地下の卵の部屋で祈りを呟いていた。

つい先日、卵にヒビが入ったのは、この事態をフツアの神が予測していたから…と
思ったのだ。

もし…巫女である双子が強く祈れば…神は応えてくれるのではないか…。そんな根
拠もない希望に双子は賭けていた。

ゴジラだけでは勝てない。

彼らの神はゴジラとは遙か昔、海の上で戦い、お互いに傷を負って退いた。ゴジラは
生き、神は息絶えてしまったが…。

その神が残してくれた卵…。

「…お願いです…。我らの願いを聞いてください…」

「我らフツアの民が全て、食い尽くされるかされないかの瀬戸際…。仮に全てを救えな
くても…命を繋ぐ者たちに…救済を…!」

手を合わせて必死に祈る。

だが、卵からに返事はない。やはり…ずっと目覚めぬまま…地球と共にするのかと
思った時、卵から音が…。

「ああ……」

パキパキと大きな音を奏でて、卵が割れていく。

繭から太い足が出て、邪魔な殻を壊していく。

「フツアの…神…」

そして…卵の部屋全体を覆う程の翅を広げ、神は天井から出て行った。
綺麗で…優雅な虹色の翅を羽ばたかせて…。

第23話

ギドラはゴジラに噛み付いて、何度も…何度も地面や山に叩きつけて、力の差を見せつける。だが、3つの首の1つがある怪獣を捕捉する。ゴジラを口から離し、凄い速度で迫ってくる者に目を向ける。

そして…ギドラから見て、山の上に現れたのは…七色に輝く蝶だった。

「なんだ、あれは？」

金色の中に七色の光が眩しく輝いていた。

しかもそれを放つのは大きな翅を広げて、ギドラに敵意を向けている巨大な蝶…。マーティンたちがその神々しい姿に見惚れていると、突然フツアの民は「おお」と言葉を漏らし、地面に膝を付いて手を合わせた。

「あれこそ…フツアが長らく待っていた救いの神…モスラ…」

「モスラ？」

モスラは翅を大きく羽ばたかせて、突風を巻き起こす。

そして…洞窟から出てきた双子は歌を歌い始める。

「モスラヤ…モスラ…ドゥンガンカクサヤン…インドウムウ…」

その歌声に応えるかのように……モスラはゴジラとギドラのいる方向に高速で進んでいった。

そしてその歌は双子だけでなく、フツアの民全員が歌うにまで発展する。清らかな歌声は……夜空を覆う黒い雲よりも……澄んでいた。

ギドラの三つの頭は全て七色に輝くモスラに向いていた。

黄金に負けない光を放つモスラに興味を惹いたか……はたまた、新たな敵が現れたと認知して、今すぐに殺してやろうと思ったのか……。

正解は後者だった。

口元に電撃を溜めていき、一気に放射した。

モスラは何とそれを翅を羽ばたかせた際に舞い散る鱗粉を利用して、電撃熱線を反射させたのだ。

3つの光線はモスラに当たるところか、放ったギドラの頭に直撃させた。受けた反動で一気に転げるギドラを横目に、モスラは倒れたままのゴジラの上に翅を休め、緑色の光を浴びせる。

マーティンから見ても、あれが何の役目を果たしているか瞬時に理解した。

モスラはギドラを倒す力は有してない。

だが、癒す力はある。そこでゴジラに力を与えて、ギドラを殺すことを任せようとしているのだと…。

だがギドラもそこまで頭が悪い訳ではない。

すぐに立ち上がり、長い尾でモスラの身体を掴むと虚空へと投げる。

投げられはしたが、モスラはすぐに態勢を立て直した大空を舞う。

再び電撃光線を放とうとしたが、1匹がそれを止める。

すると、突然大きな翼をぐつと閉じると、翼に噛み付いてエネルギーを蓄えていく。

ゴジラに噛み付いていたお陰で、ギドラの腹の中はエネルギーで満たされている。

そして、翼を一気に広げると同時に何十もの電撃を空中に産出させた。

いくらモスラがギドラの光線を跳ね返す鱗粉を有していても、数十近い電撃を全て跳ね返すのは流石に不可能だった。

最初の数撃をどうにか凌いだだけで、後からは何度も食らっていき、翼の一部が焼け爛れて撃墜されてしまった。身体を炎上させながら、地面に落ちていくモスラにフツアの民と双子の姉妹は手を合わせて、その魂が安らかに行くように祈る。

邪魔者がいなくなつたギドラは咆哮を上げて、嵐を更に激しくさせる。

だが、その時だった。

今まで倒れていたゴジラが突然立ち上がり、一本の首に噛み付いたのだ。唐突の襲撃

にギドラも赤い目を見開かせているように見える。

そのままゴジラは乱暴に噛み付いたまま、ギドラを地面に伏せさせた。

「何だ？どこからあんな力が……！」

メトファイエスもこの事態ばかりは想定外だったようだ。

ゴジラはそこから足で何度もギドラを踏みつける。だが、ギドラも負けじと電撃で応戦する。

光線を胸に受けたまま後退していくゴジラだが、全く倒れない。

しかも……ゴジラの電撃ばかりが背びれに溜まっていく。一体何がどうなっているのか……誰にも分かっていない。

実は……モスラが撃墜された後に、自らが持っていた力をほとんどをゴジラに託したのだ。

そして残りは……。

ギドラの洗脳に耐えるリカに小さな声が耳に響く。

『大丈夫よ……もう少しで終わる……』

「え？」

『あの男の目に埋められたモノを壊しなさい。そうすれば……彼は戻ってくる……。ギド

ラの力も……』

それだけ聞こえた。

あとは何も聞こえなかった。だが：メトファイエスの弱点が分かった。

耐えようと必死になろうと思ったが、既に洗脳する力もないのか、いつの間にかリカの身体は楽になっていた。

リカは立ち上がり、ゴジラとギドラの激闘を見ている隙に膝を蹴って、バランスを崩させる。

「なっ☒」

そして、地面に押し倒すと右目に填まったモノに指を押し当てた。

「君は……君も……!!?この黄金の輝きを見て諦めがつかないのか!!?滅びがない世界などない!それなら……いつそ……全て……!」

「そんなの……あなたが決めたただの御宅でしかない!!?滅びが定めの世界なんてこの世にない!私たち人類は……この黄金を見ても……燃え盛る大地を見ても……焼け焦げた雲が覆う地球を見ても……決して屈しない!!?それが……私たちが今まで生きてきた理由よ!!?!!?」

そう叫んで、填められたモノを砕いた。

途端にギドラが悲痛な叫びを上げる。

力を永久に与えてくれる源が断たれてしまった今、目の前のゴジラを止める術はない。逃げようと翼を広げて、大空に舞うが：ゴジラがそれを許してくれるはずがない。眩しい黄金が少し鈍くなったギドラに青い目を向け、尾を高々と掲げる。そして一気に振り抜くと、青い斬撃がギドラの翼を直撃する。

翼の半分以上を焼き切られたギドラは地面に落下する。

そこに間髪入れずにゴジラは熱線を放つ。

ギドラも残った片翼にエネルギーを溜めて、十数の光線を放つ。

熱線と光線は衝突を繰り返し、連鎖爆発を生む。

しかし：ゴジラの熱線は止まらない。その後放った1発は途中で枝分かれして、ギドラの至る所に着弾する。

ギドラは悲鳴を漏らし、ただ後退を続ける。

それでもゴジラは止まらない。

口元にエネルギーを溜め、ギドラに何発も当てる。

お陰でギドラはもうポロポロで、黄金の輝きはもやは無くなっていった。

そして：最後にゴジラは足をズンつと踏み込み、尾を地面に叩きつけて位置を固定する。

背びれの電撃も色合いが増していき、背びれどころか身体全体に広がっていく。

ギドラは口から細かい声を漏らして、ゴジラを見ている。

側から見ればもう戦意は失っているのに、ゴジラは容赦しない。

これが…この星に生きる破壊王の力…。

一段と太い熱線が…口から発射された。

普段放出する熱線の3〜5倍はあろうと言う太さだ。

それはギドラの長い首の真ん中を横切り、一回終わらせる。

ギドラは一瞬、立ったままだったが、3つの頭がすぐに落ちた。

そしてもう1発…特大の熱線を吐き、ギドラの肉片が一欠片も残らないレベルで全

てを焼き尽くした。

ゴジラは青い目を天に向けて…怪獣王だと言わんばかりに…天高く咆哮するのだった。

のだが、ゴジラはすぐにとある場所に足を進めた。

それは焼け落ちて、力もないモスラのところだった。

フツアもマーティンも…止めを刺されるのではと危惧したが、ゴジラは数秒…モスラを見詰めると、その身体を優しく掴んでフツアの洞窟の近くに運んだ。

「ゴジラ…お前…」

リカに支えられ、左目を抑えたワタルも今の様子を見る。

ゴジラはモスラと人類、フツアを一瞥した後にその背を向けた。

感謝の印……それとも……共にギドラと戦い、その亡骸を運んでくれただけ……なのかは分からない。

何はともあれ、ゴジラは襲わなかった。

ワタルたちはゴジラの姿が見えなくなるまで……その勇姿をずっと眺めているのであった。

エピソード

最終話 ゴジラ

ワタルたちの前から去っていくゴジラが焼き付いて…遂に視界から消えても…そこにいる者たちは釘付けになって暫く動かなかつた。

そして最初に身体を動かしたのはワタルで、向かったのは光を失い、翅を焼かれ、無惨な姿になったモスラの亡骸だった。

何故…ゴジラがモスラをここまで持つて来てくれたか…。

その真意は分からない。

だが、ゴジラにも何かあるからここまで連れて来てくれたんだ。

ワタルはモスラの身体に手を当て、目を閉じてこう呟いた。

「ありがとう…俺たちのために…」

それを聞いたリカたちもワタルに倣って目を閉じ、モスラの冥福を祈る。マイナとミアナは天に向けて、あの歌を歌う。

綺麗なソプラノ声朝焼けの空に舞って行った。

それからはごく普通の生活だった。

唯一失ったと言えば、ワタルの右目だろう。メトフィエスの洗脳とギドラを呼ぶための眼帯をされたためだ。

実際、視界は以前より狭まり、よく物に躓きそうになるが、それをリカたちが支えてくれている。そんなことしてくれなくても…と、ワタルは言うのだが、彼らはやめない。そんなリカたちに感謝をしながら、更に一年が過ぎた。

ある日、フツアの人たちが広場に木製のものを設えているのが見えて、ワタルは気になつてミアナに聞いてみた。

「これは？」

「呪いよけ…準備……。これ、祈る…無事に生きられる…」

「呪いよけ…か」

形はまるで人のようで、大きな翼が生えた人間のように見えたが、その下には藁で作られた人形が2つ…手を繋ぎ合っている形で置かれていた。

「ハルオ…呪い…無くすため」

「……」

ワタルも今から考えてみると、本当はゴジラを殺したかったのかと疑問を持ってしま

う。本当は……ただ、あの狭い船室で……暗い宇宙で……未知の星に行くのが嫌なだけだったのかも思えた。

地球に還つて……普通に生きていく……。

それが叶えたかつた夢……。正に今のように……。

「……ワタル？」

「俺も……呪いよけをするよ。もう……二度と誰にも惑わされないように」

「それが、いい……」

マイナは笑顔を作ると、ワタルの手を取つて座らせる。

そして……人形を渡す。

「おまじないをして。これが……呪いよけの儀式……」

「ああ」

ワタルはマイナに言われた通りに小さな声でおまじないを言い続ける。その横では……誰かに似た顔のフツアの子供が同じように詠唱していた。ワタルは一瞬、その子をどこかで見たことがあると、直感したが、そんな考えは放棄した。

彼にとつて、人類が栄華を誇っていた時代は終わり、今は新たな時代に向かっている。

昔会った人がどうか、どうでも良かった。

彼はそれから外に出て、春の花が咲き誇る丘に座っていた。

こんな酷い環境でも生きていける生物は凄いと思いつながら、花を一つ取る。

「…俺たちも…この花のように…しぶとく地球で生きていたら…何か違ったのだろうか
…」

ああ……そうだよな…。

「え？」

聞いたこともない声が……どこかから聞こえた。

メトファイエスみたいな洗脳でもない。

この丘から聞こえた。

「誰の声だ？」

考える間もなく、リカが声をかける。

「ワタル……飯だよ！」

「すぐ行くから」

ワタルはそう言って、立ち上がり、そこから見える黒色の背びれを持つ怪獣に目を向けた。

相変わらず……ゴジラはこの地球に君臨する王だ。

だけど、ワタルは逆らう気がなかった。

何故か……それは、奴が……この地球自身だからだ。

ワタルはそう心に思いながら、花の丘から降りる。

そしてゴジラ・アースは……敵も居ないのに、高々と咆哮するのだった。

| 完 |

おまけ

登場人物／怪獣紹介

登場人物

サトウ・ワタル

S A T O W A T A R U

性別：男性

種族：人類／日本人

階級：大佐

年齢：30

本作主人公。

幼い頃は自然が大好きな青年であったが、ゴジラが人類の文明を破壊し尽くしたせいで、地下で暮らすことになり、その後地球からも逃げるようにオラテイオ号に乗る。

人工知能「オムニエレクテイオ」の選別に選ばれた少ない少年でもある。選ばれた理由は不明。

ビルサルドの策略と知らず、地球に戻ることになり、そこでゴジラ討滅戦を一年前に

実行したハルオから受け継いで、ゴジラ・フィリウスを倒す。

が、最強のゴジラ・アースが現れ、一時は倒せないのでは…とも思ったが、ナノメタルの生存で再び希望を持つ。

それでも倒せなかったため、ゴジラ・アースを倒すことは諦め、現代に至るまで…フツアと共に暮らしている。

リカ・コウナミ

R I K A K O N A M I

性別：女性

種族：人類／日本人

階級：少尉

年齢：27

本作ヒロイン。

地下での暮らしでワタルと一緒に過ごした幼馴染み。

その頃からワタルのことは心から憧れており、冷凍装置から起きた後すぐに身体を動かして、ワタルの役に立ちたいと思いたい程。

ちよつとだけ…ワタルに恋心が無かった訳でもないが、それらは捨て、今はワタルの

ために全てを頑張っている。

カイル・アランバート

KYLE ALAN BART

性別：男性

種族：人類／アメリカ人

階級：中佐

年齢：30

ワタルと気が合う数少ない親友。

カイルもワタルと同じようにゴジラに友達を殺され、憎しみを抱いていた。そのせいで、ビルサルドと結託して地球に逆戻りするよう、人工知能「オムニエレクトイオ」に細工をしてしまう。

地球でゴジラを一線交えている間に、せめてもの懺悔に高射砲台で突撃、ゴジラの熱線を受けて戦死する。

カール・セバスチャン

CARL SEBASTIAN

性別：男性

種族：人類／アメリカ人

階級：オラテイオ号船長

年齢：55

船長としての器は確か。

いつも冷静沈着で、無駄なことは考えない合理主義。

そのため、オラテイオ号に残っていても、ワタルたちと連絡は取り続けていたが、無事かではなく、『ゴジラを倒したのか?』と冷たい印象も見られる。

最期はゴジラの熱線を母船ごと撃ち抜かれて死亡する。

ランド・ベルド

LAND BELDO

性別：男性

種族：ビルサルド

階級：ビルサルド総代表

年齢：90

アラトラム号に乗ったドルドよりも階級は高い人物。

ガルグと同じように僅かに残ったナノメタルを持っており、時折冷凍装置から抜け出て、いつ再起動するのかと待っていた。

時が流れ、ナノメタルが再起動したことを知ると、カイルと協力して半ば無理やり地球に帰還させる。

ナノメタルの力に心酔して、絶対に倒せると思っていたが、その圧倒的力の前に心が折れ、ビルサルドの総代表として：地下ナノメタル基地でその生涯を終える。

ユリ・アラタ

YURI ARATA

性別：女性

種族：人類／日本人

階級：少尉

年齢：27

リカの親友。からかうことが好き。

最初のゴジラ討滅戦では、際限なく努力してゴジラを倒し、ゴジラ・アースからの襲撃に生き残った数少ない隊員。

マーティン・ラツザリ

MARTIN LAZZARI

性別：男性

種族：人類／アメリカ人

階級：少佐（アラトラム号時代）

年齢：35

ゴジラとの激闘を乗り越え、アラトラム号の数少ない生き残り。

パワードスーツを脱ぎ、フツアの服を一年近く着ていたためか、白い肌は少し黒くなっている。

髪も以前より短くしてある。

一年経って、ワタルたちと会い、交流を深めると同時に様々な協力をしてくれる。

そして、地球に現れる数多の怪獣を興味深く考察する。

ムルエル・ガルグ

MULU—ELU GALU—GU

性別：男性

種族：ビルサルド

階級：中佐（アラトラム号時代）

年齢：61

ハルオにより死亡したとされていたが、ナノメタル侵食はマーティンですら想像も付かない場所にまで及んでおり、偶然ワタルが発見、そして、起動したことにより復活。

ナノメタルに取り込まれた影響で身体は全てナノメタルになっている。それでも思考力は健在で、最期までワタルのために尽力した。

リルエル・ベルベ

R I L U | E L U B E L U | B E

性別：男性

種族：ビルサルド

階級：少佐（アラトラム号時代）

年齢：56

ガルグと同じく、ナノメタルの再起動により復活。

ベルベの違うところは、ヴァルチャーの墜落で身体を欠損してしまい、4割はナノメタルで補われている。

ガルグと違い、ワタルはあまり信用しておらず、自ら行動することは少なかった。

メトファイエス

M E T P H I E S

性別：男性

種族：異星人「エクシフ」

階級：中佐（アラトラム号時代）

年齢：50

ギドラを召喚するために長らく待っていた。

そして：ハルオの次にワタルに狙いを定めたメトファイエスは、彼を洗脳し、ギドラを

呼ぶ土台にする。

以前のような宗教的なことは全く言わず、理不尽な理で地球の破壊を目論む。

最期はリカにより、消滅：したと思われる。

彼はゴジラ：怪獣に対する憎しみでまた現れるかもしれない。

マイナ

M A I N A

性別：女性

種族：フツア

年齢：18

ハルオの亡き後、彼との命の繋ぎで産んだ子を育てる母親に育っている。それでも双子の姉妹として時折祭壇に上がる。

最初は警戒していたワタルたちも、ハルオと同じような人だと分かると、すぐに打ち解けあつた。

ミアナ

M I A N A

性別：女性

種族：フツア

年齢：18

ワタルたちと最初に会った時から、心を通わせた人物。

ただ、モスラの卵で祈りを続けていて、あまり周りの状況は把握出来てはいなかった。

怪獣

ゴジラ・アース

G O D Z I L L A E A R T H

地球に最初に現れたゴジラが20000年の歳月をかけて、巨大化：進化した究極の個体。

最初にワタルたちがゴジラ・フィリウスを倒した時、地底にいたのは地球に迫ってくるスペース・ゴジラに備えてのものだった。

全てを焼き尽くす熱線：原子レベルから破壊する超振動波光線：何もかもを切り裂くプラズマカッター。

更に周囲のエネルギーを吸収して、更なる強化も行える。

それからも幾度となく、あらゆる怪獣がゴジラに牙を剥いたが、全て完膚なきまでに打ちのめされ、倒されていった。

このゴジラこそ、「破壊の王」と呼ぶに相応わしい。

スペース・ゴジラ

S P A C E G O D Z I L L A

結晶体を身体中に付け、宇宙の中を高速移動してやって来た宇宙怪獣。ゴジラ・アースと容姿が似ているのは、ゴジラ細胞（通称G細胞）が宇宙に飛び、何らかの作用でそのような怪獣を生み出したのではとマーティンは予測した。

向かってくる最中、オラティオ号に激突して乗組員を全滅させる。

ゴジラの熱線を真正面から受けても砕けない結晶の硬度と破壊力を有している。更に地球内部のエネルギーを吸収することで結晶内に高密度エネルギーを蓄え、それを自らの力にすることが可能。

他にも地形操作や重力操作、斥力操作も行える。

最期は紅く輝くゴジラのプラズマカッターで首を切り落とされて死ぬ。

デストロイア

DESTROYAH

芹沢博士が作り出した生物で、2000年：地下室に閉じ込められていた。ところがゴジラの熱線がその部屋の一部を砕き、デストロイアが解き放たれる。

最初はセルヴァムを餌に成長し、3mを超える大きさになるとフツアや人類にまで襲いかかるようになる。

そして最終的に全ての個体が合体し、デストロイア完全体となってゴジラと戦う。口から吐かれる光線はそのゴジラの巨体を意図も簡単に吹き飛ばせる威力を持つ。

他にも幼体に分裂して、それぞれが同程度かそれ以下の光線を吐ける。

最期はゴジラ・アースの十字プラズマカッターを受け、肉体が残らない程に熱線を打

たれて死ぬ。

キングギドラ

K I N G G H I D O R A H

メトファイエスたちエクシフが崇高する虚空の王。

全て黄金に染め上がる程、身体は黄金に包まれ、三つの首と二つの尾、そして巨大な翼を有している。

ハルオたちの時は、ゴジラから触れることは出来なかつたが、今回は地球環境に適応した形でやって来たギドラは触れることが出来る。

しかし：近づくこともままならない程の光線の威力がゴジラを襲った。更に重力操作、嵐を起こし、嘯むだけで全エネルギーを吸収する能力を持つ。

この力の源はやはり目に嵌め込まれたものによって制御されており、それを壊されると弱体化する。

最期は怒り心頭のゴジラに熱線を数え切れなくらいに撃たれ、無残に死ぬ。

モスラ

M O T H R A

フツアの洞窟の中で長らく眠っていた神。

鮮やかな翅を持ち、これらは癒しや力を与える。

翅を動かす度に舞う鱗粉には、ゴジラ、ギドラの熱線や光線を跳ね返らせる力を持っている。

ただ、それ以外にモスラには攻撃方法はなく、ギドラの連続した光線を大量に浴びてしまい、絶命する。

その亡骸はゴジラによって、フツアの洞窟まで運ばれた。

ゴジラとモスラは敵対ではなく…共存関係にあったのかもしれない。